令和5年度　岡山一宮高等学校　学校経営における具体的な取組

(1)　ＳＳＨ事業の成果と課題の集約とその普及（ 総合評価：Ｂ ）

（2024．3．21）

担当		各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	結果分析・改善策
SSH戦略室	Ⅰ　iCコアカリキュラム等の開発と実践	学校設定科目それぞれの目標を達成する教育を実践する。ここでは主としてiC課題探究α，iC理数探究Ⅰ，iC進路探究について記述する。 iC課題探究α ・広く自然現象や社会現象をとらえるなかで課題を発見し，科学的・学術的な手法で探究し，その結果を考察することで課題に対する理解を深める。この一連の活動を通して探究的な態度と創造的な能力を養う。地域社会の課題解決につながる文理別アプローチの成果を文理を越えて統合する探究活動を行う。ポスター作成・発表の技能を身につける。広くSDGsに関わる課題を設定し，グループで探究する。 iC理数探究Ⅰ 科学及び数学に関する課題を設定し，その課題の解決を図る活動を通して，専門的な知識と技能の深化，総合化を図るとともに， 様々な事象や課題に主体的に向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度や探究の過程を振り返って評価・改善しようとする態度及び倫理的な態度を養う。 iC進路探究 　一宮高校での学びと進路の接続がなされるよう、計画・活動・計画の振り返りを行い、理想とする進路実現,その先の社会での将来像を明確にさせる。	iC課題探究α 課題としては研究の記録を残すことはできたが、グループで共有ができなかった。よって、研究の記録をディジタルで残し共有化して振り返りを行いやすくできるようにする。 iC理数探究Ⅰ 「研究記録　自己評価表」「理数探究の記録」や日頃の指導において、生徒の自主性を尊重しつつ適切な助言を行った結果、充実した探究活動を行うことができた班が多かった。しかし、全ての生徒や班できちんと取り組めていなかったので、今年度も「研究記録　自己評価表」「理数探究の記録」について、継続的に取り組む必要がある。専門的で高度な内容の指導が本校内の教員だけの指導では限界があるので、卒業生を中心とした大学関係者との連携が今後の課題である。 iC進路探究 「未来の自分史（志望理由書）」作成を通して、1・2年の学びの振り返りを行い、学びと将来がどのように接続できるかを考えた。「未来の自分史（実現計画書）」を作成し、どのように未来の自分史を実現するかを考え、具体的に志望大学を調査し、進路実現にむけての計画を立てた。二学期の活動は自分の身につけた知識・技能や強みを生かした進路実現に向けた取組みを計画し、個人の必要に応じた取組み（自学・面接・集団討論など）を行った。これまでの学びや経験を進路実現に接続できない、しにくい生徒への助言と多くの生徒が1・2年の学びが散在している状況でそれらをどのように整理するかが課題である。	iC課題探究α 分野ごとにクラスルームを作成して、グループごとにフォルダを作成することでデータの共有を行いやすくする。 iC理数探究Ⅰ ・「研究記録　自己評価表」「理数探究の記録」の取組みをきちんと行うことで計画的に研究を行うことができるよう指導をする。 ・卒業生を中心とした大学関係者との連携ができる体制作りを行う。 iC進路探究 ・志望理由書の添削指導等を通じて、過去と未来の接続をより明確に深化させる。　・「Mirano手帳」を活用して、学びの蓄積を整理し、有用に活用できるポートフォリオ化を進める。	iC課題探究α ・研究活動を通して、自然現象や社会現象を発見し、課題解決につながるアプローチの方法が身についている。また、研究活動を通して、探究的な態度と創造的な能力が身についている。 iC理数探究Ⅰ ・研究活動を通して、様々な事象や課題に主体的に向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度や探究の過程を振り返って評価・改善しようとする態度及び倫理的な態度が身についている。大学との連携ができており、専門的な助言や指導ができる体制が作られている。 iC進路探究 ・過去，現在，未来の自分を繋げることができ，自分自身の成長を知り，次の進学先や将来像が明確に描けるようになる。・自主的，主体的に学ぶことができ，自分に必要な学びを自分で計画を立て，実施することができるようになる。 評価Aの基準 iコンピテンシー5つの資質能力の4月～12月の変容について A：下位尺度25項目すべて伸びている B：iCそれぞれの平均値が伸びている C：平均値でどれかが下がっている	iC課題探究α ・各分野でクラスルームを作成、グループごとで研究計画書などを共有しながら探究活動を行っている。 ・課題探究ポータルサイトを作成し、年間スケジュールや各種発表会、イベントの周知を図っている。 ・探究活動の出発点である仮説の設定に悩むグループが多いことから、外部講師相談会を早い段階で複数回実施し、初期指導の充実を図った。 iC理数探究Ⅰ ・毎回の理数探究の時間で「研究記録　自己評価表」「理数探究の記録」の取組みを行っている。中間報告会Ⅰでは、指導いただいた大学の先生から、「目的が明確で、計画的に行われている班が多い」というコメントをいただいた。しかし、きちんとできていない班が少数見られるので、年度末に向けて継続的に指導を続けたい。 ・卒業生を中心とした大学関係者との連携については、分野別の卒業生名簿を作成し、その名簿から選択した個人に各研究班の困っている点などを直接メールしたり、中間報告会Ⅰ・Ⅱの資料をHPに限定公開して卒業生から助言をいただいたりする体制を作った。 iC進路探究 ・志望理由作成を通して，過去，現在，未来の自分を繋げる活動を行った。また，志望学群ごとに分かれ，志望先を他の生徒に紹介したり，志望理由を読んでもらう，他の生徒の志望理由を読んで評価をする，といった取り組みを行った。 生徒の振り返りより抜粋 ・友達との志望理由の交換により、進学目的や大学選びが明確化された。 ・友達の志望理由を聞くことで、自分の選択肢を比較しやすくなった。 ・友達の志望理由を聞くことで、自分の選択肢を再評価できた。 ・新たな視点から進路を考え、適切な選択ができるようになった。 ・自分の志望理由を整理し、他者に伝えることで、自己理解が深まった。	B	iC課題探究α ・各グループで研究活動を実施、発表、相互評価までを行った。最終発表は1月26日に体育館にて発表。その後は、振り返りを行い、研究内容の発展の方向性を考えるだけでなく、自らの進路とも関わらせてどのような研究を大学で行っていきたいかを考えていく。 ・校内の発表会だけでなく、サイエンスキャッスルや高校生探究フォーラム、探究活動プレゼンテーションアワードなど外部の大きな発表会でも発表を行った。 iC理数探究Ⅰ ・「研究記録　自己評価表」「理数探究の記録」の取組みをどの班も取り組み、研究活動を活性化することで、様々な事象や課題に主体的に向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度や探究の過程を振り返って評価・改善しようとする態度及び倫理的な態度を多くの生徒が身につけた。 ・卒業生を中心とした大学関係者との連携については、分野別の卒業生名簿を作成し、その名簿から選択した個人に各研究班の困っている点などを直接メールしたり、中間報告会Ⅰ・Ⅱの資料をHPに限定公開して卒業生から助言をいただいたりする体制を作ったが、具体的な助言をいただくことはなかった。 iC進路探究 ・昨年度まではクラス単位での活動が主であり，志望する学群別での活動はなかった。そのため，今年度は自己探究プログラムに至るまでを，志望する学群別での活動を主として実施した。「学群別活動（志望校についての情報交換）」，「学群別活動（志望理由の相互評価）」，「探究活動の伝達」についての生徒アンケートでは肯定的な意見がほとんどで，学群別での活動が進路決定，自己理解，志望理由改善に活かされていることが分かった。「前期振り返り」で行った進路実現ノートへの目標点の書き込み等では自身の現状を把握し，自身の成績の現在地を知ることに活かすことができた。 ・「自己探究プログラム」では，生徒個々の受験形態に応じた活動を計画・実施することができた。国公立大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の出願数に対する合格者は12月末現在で約5割となっている。	B	iC課題探究α ・クラスルームだけでなく、ポータルサイトを利用することで、様々な探究に関する情報を一元集約できた。また計画的な探究活動の実施に生かすことができた。 ・生徒らの探究活動に対して、どのように教員側が指導を入れていくかについては工夫の余地がある。指導記録などの作成を行い、適切な引継ぎが行われるようにしたい。 iC理数探究Ⅰ ・「研究記録　自己評価表」「理数探究の記録」の取組みは、主体的な態度の養成に関しては効果的な取り組みであるが、生徒の目標管理と自己評価、教員の助言が主となっているため、評価に関しては課題がある。ルーブリックを用いた形成的評価を繰り返し行うシステムが構築されれば、さらに充実した探究活動になると考えられる。 ・卒業生を中心とした大学関係者との連携については、具体的な方策を改善する必要がある。例えば、本校を卒業する卒業生に対し、卒業前に大学進学後の協力体制を紙面で具体的にお願いをしたり、同窓会総会等で具体的な助言方法や協力体制などを紙面で紹介したりする必要がある。 iC進路探究 志望学群別の活動は生徒の進路決定，自己理解，志望理由作成にとって非常に有益であった。しかし，活動時間数的にもう少し余裕があるとより良い活動ができると考えている。学校評価アンケートにおける進路決定に向けての情報提供の項目がより良い結果となるには，志望大学の研究室のリサーチ方法や担当教員からの講話，相談などの時間を設けることや適宜適切な時期に進路行事を企画することが必要であると感じている。
	Ⅱ　サイエンスプロジェクト	先端研究に挑戦し，研究者・技術者を目指す意欲を育成。科学部等の課外活動を充実するための取組や科学技術・理数系コンテストなどへの参加を促進するための取組を開発し実施する。	1　先端研究所研修 8月　：岡山理科大学研修（1日）を実施。 12月：新たに神戸研修（1日）を実施。 3月　：東京大学研修（2泊3日）を実施。 2　サイエンスミーティング 岡山理科大学での先端研究所研修で課題研究の相談会を実施。 他の機会での実施を検討する。 3　学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 参集開催のものが増え，直接対面で発表できる機会が増え，理数科だけでなく普通科のグループも積極的にコンテスト等に参加した。 科学オリンピックへの参加も増加し，今年度は114人（昨年度101人）が参加した。	以下の取組を実施する。 1　先端研究所研修 2　サイエンスミーティング（研究者と生徒の交流） 3　学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム	1　先端研究所研修 先端研究所研修を実施し，評価を基に見直すことができる。 2　サイエンスミーティング 課題研究の相談会を実施できる。 3　学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 各教科や理数科係、普通科課題研究係等と連携し，生徒の積極的な参加を促し，参加者を増やす。 評価Aの基準 ・先端研究所研修を3回以上実施できる。 ・サイエンスミーティングを2回以上実施できる。 ・学会発表や科学オリンピック等の参加者を昨年度よりも増やすことができる。	1　先端研究所研修 ・8月1日に岡山理科大学研修を実施した。参加した生徒の感想から、今後の課題研究について参考になったという肯定的な意見が100%であった。 2　サイエンスミーティング ・岡山理科大学研修で、課題研究の相談会を実施した（物理・科学・生物・数学・情報の5分野）。 生徒からは次のような感想があった。 ・大学の施設や研究環境の見学により、学校での学習と実際の研究活動の関連が理解できた。 ・大学の研究者との交流を通じて、実際の研究手法やアプローチが学べたので基礎的な理解が深まったと思う。 ・大学の先生に相談できる機会があり、研究で困っていた部分が解決できた。 ・大学の施設見学や研究室訪問で将来の進路選択の具体的なイメージを持つことができた。 3　学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム ・科学オリンピック 全国物理コンテスト38名、化学グランプリ12名、生物オリンピック61名、日本数学オリンピック21名参加。昨年度よりも22名参加者を増やすことができた。	B	1　先端研究所研修 ・8月1日に岡山理科大学研修を実施した。参加した生徒の感想から、今後の課題研究について参考になったという肯定的な意見が100%であった。 ・12月26日に兵庫県研修を実施した。生徒に研修内容を募集し、研修先を決定した。参加生徒の感想も肯定的な意見が100%であった。 ・3月8日～10日に東京大学研修を計画している。 2　サイエンスミーティング ・岡山理科大学研修で、課題研究の相談会を実施した（物理・科学・生物・数学・情報の5分野）。 生徒の感想は「大学の施設や研究環境の見学により、学校での学習と実際の研究活動の関連が理解できた。」「大学の先生に相談できる機会があり、研究で困っていた部分が解決できた。」など課題研究を深められる取り組みとなった。 3　学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム ・学会発表・コンテスト 理数科だけでなく普通科課題研究のグループも様々な学会やコンテストで研究発表を行った。 ・科学オリンピック 全国物理コンテスト38名、化学グランプリ12名、生物オリンピック61名、日本数学オリンピック21名参加。昨年度よりも22名参加者を増やすことができた。	A	・昨年度に引き続き、参加生徒の評価が高かった岡山理科大学研修と東京大学の研修を実施した。今年度は新たな取り組みとして、生徒から研修内容を募集し、研修先を決定・実施をした。参加生徒の感想も全員が肯定的なものであり、来年度も引き続き、実施をしていきたい。 ・新型コロナウイルスが落ち着き、対面での学会発表やコンテストが増えている。限られた予算の中で生徒が課題研究の成果を発表できる機会を増やしていくために、オンラインで発表できるコンテスト等を新たに見つけていく必要がある。
	Ⅲ　グローバルプロジェクト	国際性を身に付け，国を越えて課題解決を目指す意欲を育成する。	1　エレメンタリーグローバルプログラム 1度限りの交流となってしまっているため、複数回実施することができないか検討する。また、英語で思ったことを伝えられていない時にどのような方略をとるべきかの指導を行う。 2　海外との交流 慶南科学高校との交流は引き続き行っていく。また来年度対面交流を行うための準備を進める。それ以外に、オンライン等で行われている交流会に積極的に参加する。 3　理数探究英語発表 外部指導者（主に留学生）の確保、特に理系を専門としている指導者の確保に課題が残っている。また発表に向けた事前指導においては、十分な時間と回数を行えていない。	以下の取組を実施する 1　エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） 2　海外との交流 3　理数探究Ⅰ英語発表会	1　エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） ・1年生全体に対して実施する。 2　海外との交流 ・慶南科学高校とのオンライン交流を行う。 ・慶南科学高校との交流以外に海外との交流を行う。 3　理数探究Ⅰ英語発表会 ・発表方法に関するルーブリックを作成する。 評価Aの基準 1：留学生を複数回招聘し、指導を実施している。 2：慶南科学高校との交流を行う。 　慶南科学高校以外に、4回国際交流に関するイベントに参加する。 3：発表に関するルーブリックを用い発表を行う。	1　エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） 留学生を複数回招聘する計画で行事を進めることができている。今後は計画通り行事の実施ができるよう、準備を進めていく。 2　海外との交流 ・慶南科学高校と打ち合わせを行い、今年度の交流に向け準備を行っている。 ・慶尚南道訪問団の受け入れ、イングリッシュオンキャンパスへの参加など、2回交流イベントを実施できた。 生徒の感想より抜粋 ・韓国の高校生と交流することで、異なる文化や習慣に触れ、それらを尊重し理解することができた。iコンピテンシーの垣根を越える体験ができた。 ・イングリッシュオンキャンパスへの参加を通じて、国際的な視野を持つことができました。異なる国々や文化に対する興味や理解が深まったと思います。 ・異なる文化やバックグラウンドを持つ人々と交流することで、異なる視点からの問題解決能力が高まりました。自分の研究の動機を伝えるのに苦労しました。 ・来年度のオンラインによる海外交流に向けた計画を行っている。 3　理数探究Ⅰ英語発表会 ルーブリックの基本の型は作成したので、今後は実施をしながら改善をしていく。	B	1　エレメンタリーグローバルプログラム（iCEGP） 留学生を複数回招聘することができた。特に普通科では、全員が留学生にプレゼンテーションを行い、アドバイスをもらうという経験ができたことは非常に良かった。生徒のアンケートから、iコンピテンシーⅢコミュニケーション力とⅤ垣根を越える力が身についたという声が多かった。また相手の言っていることを理解できるようになるため、リスニングの力をつけたいという意見も多く、英語学習にも良い影響を与えたと考えられる。 2　海外との交流 ・慶南科学高校と打ち合わせを行い、今年度の交流に向け準備を行っている。現在外部指導者による指導を開始した。 ・オンラインによるオーストラリアとの交流を行った。また来年のオンライン交流に向けての体験を1年生iCイングリッシュで実施する予定である。年間を通じて4回交流イベントを行うことができた。 ・来年度のオンラインによる海外交流に向けた計画を行っている。 3　理数探究Ⅰ英語発表会 ルーブリックの基本の型は作成したので、今後は実施をしながら改善をしていく。	A	・今年度は1年生において、例年以上に外国の人と交流する機会を多く持つことができた。特に全ての生徒がプレゼンテーションを行う機会を持つことができたのは、非常に有意義であった。アンケートの結果からも、ほとんどの生徒が主体的に行事に参加しており、その結果肯定的な意見を述べていた。しかし来年度以降、iCイングリッシュやiCアカデミックイングリッシュといった授業がカリキュラムからなくなるため、事前準備や発表等の時間をどこで確保していくかが課題である。 ・新型コロナウイルスの影響は落ち着いてきたが、費用や実施のしやすさを考えると、オンラインでの交流が引き続き有効であると考える。 しかし一方で、現地に実際に行き対面で交流をしたいというニーズも増えてきている。慶南科学高校との対面交流が再開できれば理想だが、費用や相手の受け入れの都合から難しい面もあると感じる。 安定的に対面交流を実施するため、生徒のニーズを把握するためのアンケートを行い、新規に交流先を探すことも考える。
	Ⅳ　コンソーシアムプロジェクト	・地域との連携を深め，地域で研究者・技術者を育成する枠組みを作る。 ・地域課題から設定した研究テーマを課題探究で実施し深化を図る。	昨年度の取組状況 1　小学校・中学校との連携 ・中山中学校　ふれあいサタデーに参加 ・科学キッズフェスティバルin京山祭に参加 ・親子わくわく教室実施 2　専門科高校との連携 ・高松農業高校とドギーバッグの協同素材研究実施 3　岡山市との連携 ・岡山県高等学校ユネスコスクールネットワークと連携し、ブルガリア高校生と共同でSDGsカレンダーを作成した（7月完成） ・岡山県高等学校ユネスコスクールネットワーク事前学習会（10月）と実践交流会（12月）に参加した 4　大学との連携 ・課題研究の指導　述べ28名の教授、院生、学生を招聘し指導を受けた。 ・iCサイエンスフィールドワークへの講師招聘　述べ7名の講師を招聘した。 ・iCEGPとiC理数探究英語発表会に各16名の留学生を招聘した。 5地域・企業との連携 ・ユネスコ部：岡山トヨタ、KSBとフードロス協同啓発活動実施 　：（株）カルビー、フードバンク岡山、（株）ウィライツ、岡山高校、清心高校と合同で学童保育児童約1000人を対象にオンラインでフードロス削減イベントを企画実施した。 ・地域（一宮公民館）との連携強化 一宮公民館：高齢者対象パソコン教室、小学生対象絵本読み聞かせ、科学実験教室、プログラミング教室等 　京山公民館：マイボトルデザイン作成 ・iCサイエンスフィールドワークで理数科1年生が6企業・研修施設に分かれて研修を行った。	以下の取組を実施することで、課題探究の深化を図る。 1　小学校・中学校との連携 ・科学実験教室等の実施 2　専門科高校との連携 ・専門科高校と共同研究の実施 3　岡山市との連携 ・連携先の開拓 4　大学との連携 ・本校生徒の指導助言の依頼 ・研究者の招聘 5　地域・企業との連携 ・企業訪問研修の訪問先の開拓 ・地域（一宮公民館）との連携強化	以下の取組をこれまでの成果と課題を基に改善し、実施できている。 1　小学校・中学校との連携 2　専門科高校との連携 3　岡山市との連携 4　大学との連携 5　地域・企業との連携 評価Aの基準 ・科学実験教室等が開催できる。（1・3） ・地域の課題解決に向けた研究や研修講座が実施できる。（2・4・5） ・地域課題をテーマに探究したグループが、地域と連携し発表できる。 ・上記取り組みに参加した生徒の肯定的意見が80%以上である。	1 小中との連携 　・7/31（月）小学生向け講座 　・8/　6（日）小学生向け講座 　・8/19（土）科学実験教室 　・10/21（土）中山中学校ふれあいサタデー 　・10/28（土）親子わくわく教室 2 専門科高校との連携（普通科課題探究） 　*・8/23（水）　高松農業と共同研究　3分野＊* 4 5　大学、地域、企業との連携 　・7/29（土）防災ボランティア 　・8/　5（土）パソコン教室 　*・8/2（水）おかやまSDGsフェア2023　＊* 　*（中国銀行SDGs部員、岡山大学TFTとの連携）* 　*・9/　3(日)　スポーツアナリティクス研究会* 　　*データ解析、情報分析の企業＊* 　*（スプライザ・ダートフィッシュ・RUN.EDGE・Knous）* 　　*県内大学* 　*（IPU・県立大・川崎医療福祉・理大・吉備国）* 今年度、新たな連携ができた。（上記＊）生徒個々の満足度も高い。今後も引き続き連携した取り組みを実施し、最終的には全体に落とし込んだ評価を行う。 以下生徒の感想より抜粋 ・専門家や研究者と直接コミュニケーションが取れて、具体的な職業選択のアドバイスを得られた。 最先端の技術や研究を見て、科学の発展に興味が高まった。 ・チームでの協力と問題解決の重要性が理解でき、今後の学習に活かせることが明確になった。	B	1　小学校・中学校との連携 ・子ども科学実験教室を実施（8月） ・中山中学校　ふれあいサタデーに参加（10月） ・親子わくわく教室実施（10月） ・小学校総合的な学習の時間授業交流（1月） 2　専門科高校との連携 ・高松農業高校と普通科課題探究栄養班3班の連携（7月・8月） 　→日清製粉グループ全国高校生料理コンクール入選・学校賞受賞 ・岡山東商業高校と普通科課題探究経済班の連携（11月） 3　岡山市との連携 ・岡山県高等学校ユネスコスクールネットワーク事前学習会（6月・8月） 　実践交流会（11月）に参加 4　大学との連携 ・課題探究の指導 　県内各大学より述べ34名の講師を招聘し指導を受けた。 ・iCサイエンスフィールドワークへの講師招聘 　述べ8名の講師を招聘した。 ・留学生の協力 　iCEGPとiC理数探究英語発表会に各16名の留学生を招聘した。 ・SDGs活動 　岡山大学TFTと連携し、岡山SDGsフェア2023へ参加、発表した。 5　地域・企業との連携 ・地域との連携強化 　一宮公民館：シニア対象パソコン教室、ザ・キッズ（小説読み聞かせ、ゲーム工作、プログラミング教室等）、防災ボランティア→おかやま協働まちづくり賞の受賞 　奉還町ユースセンター：商店街と連携し、花を包む包装紙に、アップサイクルで作成した果実袋を活用した。 ・iCサイエンスフィールドワークで理数科1年生が6企業・研究施設に分かれて研修を行った。 ・ユネスコ部：（株）カルビー、フードバンク岡山、岡山高校、清心高校と合同で全国の学童保育児童を対象にオンラインでフードロス削減イベントを企画実施した。 堀口珈琲と連携しフェアトレード商品の販売、全国ユース活動環境発表大会で活動の発表した。 岡山トヨタ野田店と連携し、店舗でSDGsイベントを実施した。 学校評価アンケート「SSHに関する課題研究発表、大学との連携事業等や海外の高校との交流が充実している」生徒の肯定的意見83.1%	A	1 「子ども実験教室」や「親子わくわく教室」には、今年も多くの生徒が参加希望を申し出るなど、プログラムとして定着していることがうかがえる。参加した生徒は、小学生に丁寧に対応し、世代を超えた交流を経験できている。 2　今年度は昨年度に引き続き高松農業高校と新たに岡山東商業高校と連携できた。学校間で研究の時期がずれるため、共同研究を進めることは難しい。今年度は、研究について専門科高校からアドバイスをいただいた。 3　県下ユネスコスクール各校のSDGsについての活動を共有した。他校の取り組みに対して積極的に質問したり、ワークショップで体験したりしながら、次年度に向けて協働できることはないか協議する機会となった。 4　課題探究報告会、発表会には、今年度も多くの研究者を招聘することができた。今年度は新たに普通科課題探究スポーツ分野がスポーツアナリティクス研究会において研究の成果を発表させていただき、新しい分野の多くの大学の先生方から指導助言をいただいた。また、大学生との活動においては、大学での学びにも触れることができ、探究活動の意欲を更に高める機会となった。 5　地域との連携強化においては、特に一宮公民館の行事に多くの生徒が関わることができた。様々な活動において、地域の方から直接のフィードバックをいただくことで生徒たちの励みにもなっている。

Ⅴ　iALプロジェクト授業改善に関する取組	①探究型授業の実践に向けて、校内全体で組織的かつ計画的に取り組む体制作りを行うとともに、全教職員のスキルを向上させ、他校にも公開する。 ②探究型授業を実践することで、全てのiコンピテンシーの育成を図る。	1 「一宮学習スタンダード」に基づいた「リフレクションシート」の実施、集計は教務課と連携して行った。振り返りは2回目終了後にiALのメンバーで行い、教科に還元したが、実技教科においては質問内容がかみ合っていないものがあるため改善が必要である。 2　各教科で作成している「iCルーブリック」については、数学以外は活用できていなかった。観点別評価とのつながりが明確でないことから、活用に当たっては、各教科で使いやすいものに改善する必要がある。 3　互見授業については、年間1回実施したが、2回参観を達成するため、期間を延長した。実施時期や実施回数を検討し参観後のスキルアップのために有効な形を考える必要がある。 4　教員のニーズに即した教員研修会を実施した。 5 「いちのみや探究デー」を2日間実施し、午前中は保護者、午後は校内、校外から参加してもらった。校外の参加者へのアンケートを回収する方法を改善する必要がある。	全ての教科・科目の授業において、探究型授業を実践するよう教員に働きかけ、iCの全ての資質・能力の育成を図る。 1 「一宮学習スタンダード」に基づいた「リフレクションシート」による振り返りと分析（教務課と連携）。 2　めあてに「iコンピテンシー」を位置づけた授業実践に基づく各教科「ルーブリック」の活用。 3　互見授業の実施。 4　全教職員による授業改善教員研修会の実施 5 「いちのみや探究デー」の実施。蓄積してきた探究活動のノウハウを普及するために県内中等教育学校、高等学校教員に向けた研修等の実施。	1　リフレクションシートを用いた振り返りと分析を教務課と連携して行っている。（A：かつ、教科で共有し今後の指導に生かすことができている。） 2　各教科で現行のルーブリックを改善し、活用して評価を行っている。（A：かつ、実施後の振り返りができている。） 3　互見授業に参観し、互いに授業力向上のための意見交換ができている。（A：2回以上参観を行った教員の割合が80％に達する。） 4　全教職員による授業改善教員研修会を年1回実施できている。（A：会議に出席した教員の80％が参考になったと回答する。） 5　いちのみや探究デーを実施し、県内外の他校に向けて公開し、多くの先生方に参考となっている。（A：探究デーに参加した他校の教員の70％が参考になったと回答する。） 評価Aの基準（上記5項目のうちA評価が3つ以上）	1　教務課による7月に実施したリフレクションシートの結果と、11月に実施するその結果の推移から、生徒の変容をiALとして分析を行い、校内で共有していく。 2　現状は、iコンピテンシーの育成を意識させるため、ねらい・振り返り時に可視化できるマグネットで明示し、方向性を共有している。普段の授業で教科ルーブリック（の一部）を活用する取組を行うよう各教科に働きかけていく。 3　互見授業を実施しやすいように、今年は実施時期を6月と11月の希望制にした。11月実施希望者4名を除く56名のうち、2回の参観が完了したのは30名で53．6％に止まっている。今後、不完全実施者を含めて、11月に再度実施して授業力向上に努めたい。 4　1学期の互見授業の際に作成した「ここ見てシート」から、探究型授業について共通理解の醸成やその仕組みや方法についての研修の必要性を感じ、10月に「探究型授業に係る教員研修会」を予定している。 5　11月8日・9日の開催に向けて、現在HP上で告知を行っている。各教科で授業担当者を決定し、研修会を設定しながら授業計画を作成している段階である。数学と英語で教科横断型授業にチャレンジする。	B	1　7月・11月に実施したリフレクションシートについて、教務課が結果をまとめた。iALプロジェクトとして、7月から11月の生徒の変容について各教科のものを学年ごとに分析し(1/15)、その結果を教科にフィードバックする。【A】 2 10/3の教員研修において、教科横断型授業と「探究の6段階　岡山一宮高校Stairs MODEL」を活用する授業展開の研究協議を行った。 その後の授業や「いちのみや探究デー」に向けて各教員が授業研究や工夫を行った。探究型授業の新たな視点や既存の観点を整理して、試行するよい機会になった。【A】 3 互見授業の実施状況は、延べでの授業参観率が70%→98.3%（昨年度→今年度）（以下同じ）。2回参観の達成率が47%→68.3%。未実施率が27%→11.7%といずれも大きく改善した。【B】 4 10/3(火)に教科横断型授業と「探究の6段階　岡山一宮高校Stairs MODEL」を活用する教員研修会を行い、「いちのみや探究デー」実施後の校内アンケート結果が「参考になった。80％」、「あまり参考にならなかった。20％」であり、試行錯誤の段階であることがうかがえた。3月中に「探究の6段階」を主眼にした授業展開の教員研修を設定している。【B】 5 11月8日・9日に、「いちのみや探究デー」を開催した。午前中は1・2年生の保護者に、午後は県内の教員、県教委、SSH運営指導委員、学校評議員などの方々にHPで告知するなどして参加を呼びかけた。当日の午前中は保護者104名、午後は49名が参加した。各教科で事前・当日・事後に研修会を実施し、教科横断型授業・「探究6段階岡山一宮高校Stairs MODEL」を活用する授業について認識を深めることができた。事後アンケート（外部）では、26名の方から回答をいただき「大変参考になった。88％」、「参考になった12％」と肯定的な意見をいただいた。本校教員は、「探究の6段階」の内、「1:テーマ・課題→仮説」、「5:考察・推論」に焦点をあてて授業を参観した。【A】	A	1　リフレクションシートは、生徒自身が学習に対する取組やできるようになったことを振り返る手立てとして有効である。各教科（学年ごと）としてまとめられた結果をiALプロジェクトが分析するとともに、科目担当者が生徒の成長や課題について分析し、今後の指導に生かすように形骸化することなく、呼びかけていくことが必要である。 2　教科横断型授業と「探究の6段階　岡山一宮高校Stairs MODEL」を活用する授業展開の研究は、第Ⅴ期の取組において重点項目になり得るので、指導普及を進めていく。 3　互見授業の実施率の向上だけでなく、学校評価アンケートの「学校全体での探究型授業の工夫・改善への取り組み」の項目に関しては、7ポイントを超える高い評価であり、また「指導方法や評価の方法に関する検討や研修」の項目でも昨年度から＋0.1の6．4ポイントとなっており、学習指導の研鑽に取り組むことができた。また、目標である2回を超えて参観を実施した教員も昨年度の5人から13人へ大幅に増えており、研鑽の機運を高めることができた。しかし、達成率は目標の80%にはまだ10%届いておらず、今後も、より参加しやすい実施形態を検討していく必要がある。 4　互見授業と「いちのみや探究デー」の取組と連動する形で、教員の興味・関心を反映したテーマでかつ、課題点を見いだせる研修会を行えた。 5　対面型に戻すことにより、直接校内外から貴重な意見をいただけるようになった。formでの回答収集は便利ではあるが、回答率が芳しくなく、呼びかけることにも限界があるようである。
Ⅵ　検証評価プロジェクト	SSHの取組の評価を行う。	1　iCルーブリックを用いた変容評価をグーグルクロームを用いて行う事ができた。さらなる回収率のアップと活用方法を検討する。 2　全卒業生を対象にアンケートを実施し、24名からの回答を得られた。対象とする卒業生を限定しより多くからの回答を得られるようにする。	1　iCアンケートによる生徒の変容評価 2　卒業生アンケートによる卒業生評価	1　iCアンケートを4月と12月に実施できる。 2　対象とする期を限定してアンケートを実施し、回収率を昨年度より上げられる。 評価Aの基準 A　クロムブックを用いてアンケートを実施し、有効なアンケート回収率90％以上 B　卒業生アンケート回収率50％以上	1予定通り4月のiCアンケートを実施した。各担任の先生方の協力もあり、回答率96．4％となった。 2卒業生アンケートについては現時点では未実施である。	B	1 予定通り12月のiCアンケートを実施した。各担任の先生方の協力もあり、回答率96．3%となった。 2 卒業生アンケートを12月下旬に実施した。 依頼の方法は、①卒業生人材バンクに登録してくれた卒業生へのメール。 ②40期生の同窓会での依頼文書の配布。 1月19日（金）現在25名の回答があった。	B	iCアンケートの結果から、課題として情報分析活用力の数値が低いことが見られた。また、学年が進むにつれて肯定的な回答が多くなる傾向がみられる。学年進行につれてiコンピテンシーが育成されているといえる。 5年間を通しての課題は以下の2点である。（1）3年生でのiCの伸び悩み。（2）iCの5つの力のうち，「Ⅰ情報分析活用力」及び「Ⅱ論理的思考力」の2つの力が5年間で伸長にしにくい傾向にある。 卒業生アンケートについては、今後どのようにしてアンケートの回収率をあげていくのかが課題である。また、アンケートの実施時期、期間、間隔についても検討していく必要がある。
Ⅶ　普及・広報プロジェクト	研究開発成果の普及を行う。	SSH通信1号に付き1行事の掲載という形で内容を充実させたことによって当初の目標である35号以上の発行が実施できた。 今年度はホームページの充実に力を入れる。	1 ホームページおよびSNSによる各取組の情報発信 2 SSH通信の発行 3 研究開発実施報告書および成果物（普及用資料）の作成	1 ホームページやSNSを活用した情報発信ができている。 2 昨年度より中身を充実させたSSH通信を発行することができている。 3 年度末に研究開発実施報告書および成果物（普及用資料）を完成させることができている。 評価Aの基準 A：SSHに関するホームページの更新回数年間20回以上	課題研究専用ページにiC課題探究αの研究計画書とiC理数探究Ⅰの研究計画書を掲載した。さらに、6月と9月にiC課題探究αの各分野の困り事を掲載した。その結果、iC課題探究αの健康と栄養分野に運営指導委員の先生から助言をいただくことができた。	B	1 ホームページやSNSを活用した情報発信ができている。 ホームページの内容を大幅に更新することで、ホームページの情報量を増やすことができた。また、課題探究と理数探究の研究計画書を掲載することで外部からアドバイスをいただくこもできた。 2 昨年度より中身を充実させたSSH通信を発行することができている。 昨年度よりも生徒の感想を増やしたSSH通信を発行することができた。 3 年度末に研究開発実施報告書および成果物（普及用資料）を完成させることができている。 研究開発実施報告書の原稿を取りまとめることで報告書を発行することができた。	B	ホームページの情報量を増やしたことで本校SSHの取り組みがよく伝わるホームページになったといえる。来年度は学校ホームページが大幅に更新されるため、新しいホームページに適したページ内容を考えていかなければならない。 SSH通信については生徒の感想を増やしたことで、生徒目線で伝わる内容を盛り込むことができた。来年度は効率よく通信を作成していく工程を考えていかなければならない。
Ⅷ　SSH事業総括（SSH戦略室）	Ⅰ～Ⅶのプロジェクトチームをまとめ SSHを推進する。	昨年度の取組状況 ・令和4年度の学校評価アンケートの「SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践を行っている。」の項目についての肯定的意見の割合は教員98.6%、保護者81.6%、生徒85.4%であった。また、今年度新たに教員への項目に「SSHの各プログラムの実施に向け、担当のプロジェクトチームのメンバーと協力して取り組んでいる」を加えて、肯定的意見の割合は90.7%であった。 ・SSHの推進については各プロジェクトのキャップが頑張っている（R3）→プロジェクトチームで頑張っている（R4）となり、これにより各取組の質の向上と継承ができる体制を作ることができた。その一方で学校評価アンケートの保護者の「よくわからない」が12.5%あり、自由記述では「文系生徒にSSHは役に立たない」とご意見をいただいた。 改善の方向性 ・本校の取組が生徒や保護者に伝わっていない。「SSHと授業との繋がり」に課題があると考える。卒業生人材バンクの運用と、教科のめあてとiコンピテンシーを示し振り返りを行ってもらうためにもiALを核とした授業改善が課題である。	1　SSH戦略室会議 ・全体企画、進行、調整 ・SSH運営指導委員会との連絡、調整 ・JSTとの連絡調整 ・運営指導委員会の企画 2　SSH事業評価 ・全体評価 各種評価（生徒・保護者・教員対象）の分析。SSH運営指導委員会による評価を行い、事業全体の成果と課題を検証し、次年度へ反映する。 ・各取組評価 取組の事前事後にアンケートを実施してもらい、SSH評価委員会に取組評価を随時行ってもらい、次年度へ反映する。	1　SSH戦略室会議 ・週1回のSSH戦略室会議を核として、SSHが学校全体の取組となっている。 2　SSH事業評価 ・各種評価の分析をSSHの取組に反映させることができている。 評価Aの基準 学校評価アンケートの「SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践を行っている。」の項目についての肯定的意見の割合 A：教員、保護者、生徒すべて90％以上 B：教員、保護者90％以上かつ生徒80％以上 C：教員、保護者90％未満または生徒80％未満	1　SSH戦略室会議 ・週に1回会議を行い各PTの状況を共有している。取組については情報共有がしっかりできているが、その一方で予算要求については時間的に余裕のある予算要求ができていないという課題がある。グーグルカレンダーとチェックリストを用いて毎週の会議で予算についても共有を行う。 2　SSH事業評価 ・学校説明会の保護者アンケートからはSSHの取組についての説明が、わかった、よくわかったという肯定的な意見が100％であった。また、中学校教員対象の学校説明会のアンケートでもSSHの取組がよくわかったという自由記述があった。しかし、SSH通信が今年度全く発行されていないことや課題研究専用ページの活用状況が不明瞭なことがあり、情報発信について課題がある。 課題研究専用ページについては9月のSSH戦略室会議で活用法を共有する。 また、ホームページのSSHのページの更新を行う。	B	1　SSH戦略室会議 ・週に1回会議を行い今年度は19回実施した。グーグルカレンダーやチェックリストを用いて予算の執行状況についても確認を行った。 2　SSH事業評価 ・学校評価アンケート「SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践が行われている。」についての肯定的意見は 教員100％，保護者92.7％，生徒84.7％であった。また「SSHに関する課題研究発表、大学との連携事業等や海外の高校との交流が効果的に行われている。」についての肯定的意見は教員94.4％，保護者87.8％，生徒83.0％であった。 ・中間の取組で課題であったホームページのSSHのページについては更新を行い、わかりやすいレイアウトにした。	B	SSH第Ⅳ期指定の5年次であり、カリキュラムを完成させることに加えて、各PTが中心となり新たな取組にも複数挑戦した。教科横断授業の実施や生徒提案の研修等は第Ⅴ期につながる第Ⅳ期の成果である。学校評価アンケートの教員の肯定的意見の割合の推移は次のとおりである。 ①SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践が行われている。 94.3%(H30第Ⅲ期最終年度)→93.2%（R1）→93.7%(R2)→97.0%（R3）→98.4%（R4）→100%（R5） ②SSHに関する課題研究発表、大学との連携事業等や海外の高校との交流が効果的に行われている。 93.3%(H30第Ⅲ期最終年度)→95.9%（R1）→90.5%（R2）→90.9%（R3）→93.8%（R4）→94.4%（R5） ③SSHの各プログラムの実施に向け、担当のプロジェクトチームのメンバーと協力して取り組んでいる。 R3以前はない項目→90.6%（R4）→90.7%（R5） 全校体制が確立されている。その一方で保護者アンケートでは「SSHが何をしているのかわからない」といった記述があった。広報に課題がある。
教務課	・iALプロジェクトの授業改善に関する取組のサポート及び実践	1　7月・11月に実施したリフレクションシートについて、教務課が結果をまとめた。iALプロジェクトとして、7月から11月の生徒の変容について各教科のものを学年ごとに分析し、その結果を教科にフィードバックしている。 2　6月の互見授業を実施した時点では、2回以上参観した教員数が目標を大きく下回っていたため、2学期も引き続き未達成者に呼びかけた結果、12月末時点で2回以上の参観を行った教員が70％に上昇した。提出された参観シートの記述からも意見交換が活発に行われたことがうかがえ、事前事後アンケートから共通して関心が高い内容も把握することができた。　【改善の方向性】 1　各教科（学年ごと）としてまとめられた結果をiALプロジェクトが分析するとともに、科目担当者が生徒の成長や課題について分析し、今後の指導に生かすよう呼びかけていくことが必要である。 2　より有効な方法を探り、実施時期、回数などを検討していく必要がある。教員の興味・関心に応じた授業参観の仕組みは継続していく。	・リフレクションシートによる授業評価と分析を行い、校内外に発信する。 ・互見授業の活性化、探究デイ・公開授業の実践を着実におこなう	・iCの伸長により効果的な授業の実践ができる。 評価Aの基準 ・学期毎にiCの伸長を意識した授業について校内に情報発信する。	・リフレクションシートの結果をホームページに公開した。 ・互見授業期間に「探究チャレンジ」を3度実施し、見学を促した。	B	①リフレクションシートによる授業評価と結果集約を1、2回とも滞りなく行うことができた。 ②iALプロジェクトと連携し、11月の授業公開及びいちのみや探究デーの円滑な実誌ができた。また、授業公開についての保護者アンケートの結果集約も着実に執り行うことができ、アンケート内容から保護者からも好評をえたことが分かった。 ③教員研修のアンケートでは、8割を越える教員が「探究型授業」に前向きに取り組みたいと回答。□ □	A	・保護者アンケートからは昨年度に続き公開授業の機会増加を要望する声もあるので、来年度は公開授業を増やすことを検討する。 □
UNESCO係	外部機関・内部他分掌と連携しながら，校内でのESD（SDGs）の周知をはかる。	・2年課題探究を中心に、日々の取り組みとSDGsを結びつけ、より自分事として課題解決に向けての意識付けをする必要がある。 ・他分掌、校外機関と連携することで持続可能な環境作りを一層進化させる必要がある。	・他校との連携。 ・外部機関との連携。 ・ユネスコ・SSH委員会やユネスコ部の活動の発信。 ・課題探究との連携。	・委員会や部としてユネスコの啓発活動ができる。 ・SDGsについて2年生が自分事ととらえ，17の項目のうち1つは「説明できる」と答えることができる。 A基準：LHRで委員会主催の活動ができる。委員会、部のニューズレターが4号ずつ発行できる。2年生85%がSDGsについて「説明できる」と答えることができる。	・ユネスコ部員が他校や外部機関と連携しながら積極的な活動を行っている。ニューズレターを1学期に1号発行したが、今後は発行回数を増やす計画である。図書委員会とも連携をして講演会とリンクさせてAMDAの学習会も行った。	B	ユネスコスクールやその他の高校と連携して活動に取り組んだ。フェアートレードやフードロス削減などSDGsに関するテーマを研究した。岡山トヨタ、堀口珈琲などの企業や、岡山市やインターキッズなどの外部機関のイベントに参加した。AMDA講演の事前学習などにも取り組んだ。ニューズレターの発行など校内で活動を発信する機会が少なかった。委員会活動もあまり行えなかった。	B	ユネスコ委員会の活動があまりできなかった。ユネスコ部も前年度の活動を踏襲するだけで精一杯であったが、部員数が少なく部員の顔ぶれにもよるので、毎年同じ活動ができるわけではない。参加の仕方や関わり方なども検討が必要である。ユネスコ活動の校内の位置づけも不明瞭である。

(2) 学力向上とキャリア教育の推進（ 総合評価：Ｂ ）

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	結果分析・改善策
教務課	・学習評価(観点別評価)の工夫・改善に向けて、さらに教職員間の理解を高める。 ・iALと協力して、互見授業などを推進し、教科指導力の向上を図る。 ・指導と評価の一体化の推進	・全教科、全教職員の検討をへて、新しい3観点による評価と評定の付け方の基準を設け、1年生とその保護者に提示することができた。 ・iALプロジェクトと連携し、11月の授業公開及びいちのみや探究デーの円滑な実施ができた。また、授業公開についての保護者アンケートの結果集約も着実に執り行うことができ、保護者からも好評をえた。 ・1年生の観点別評価について、学期末毎の教科会議で教科の教員全体で評価方法と観点別評価を確認することができた。 【改善の方向性】 ・ 観点別評価方法について各教科の取組みを集約し参考となる情報を共有し、評価方法の改善をはかる。	・新教育課程の3観点による評価と評定のつけ方の実践例を集約し情報を発信する。	・指導と評価の一体化により、生徒の成長を継続的、段階的に支援することができる。 評価Aの基準 ・学校評価アンケートS12T12の評価指数が昨年度を上回っている。	・1学期末の各教科の評価の付け方について、教科主任会で集約をする予定である(9月)	B	①昨年度同様、新入生に向けて新しい3観点による評価と評定の付け方の基準を、1学期末に、1年生とその保護者に提示することができた。 ②教科主任に依頼して、観点Ⅲの評価方法について教科の取組を集約することができた。 ③学校評価アンケートS12T12の数値が昨年度を上回り、A評価の基準を満たすことができた。□	A	集約した観点Ⅲの評価方法について、新年度当初に全教員に共有し、指導と評価の一体化をさらに進めたい。また、今後も観点Ⅲの客観的な評価方法の研究を進めたい。
進路指導課	・教科指導力の向上を目指し，第一志望校に合格できる学力を育成する。 ・キャリア教育を充実させ，将来の職業や自己の生き方について主体的に判断できる生徒を育成する。 ・国公立大合格率55%(171名)以上 ・岡山大学合格者数45名以上 ・難関大学合格者数6名以上 ・進路探究の充実 ・納得のいく進路選択の実現 ・自己分析 ・大学研究、学部研究 ・志望理由の作成	・昨年度国公立大現役合格者数は189名（前年度203名）。 ・国公立大合格率 61%（昨年度58.4%）。 ・岡山大合格者数も62名（昨年度49名）。うち特別選抜での合格者が35名（昨年度26名）。 ・総合型選抜、学校推薦型選抜での国公立大合格者数は78名（昨年度78名）。合格率51.0%（昨年度58.6%） ・難関大合格者は8名（昨年度6名）と昨年度より2名増加した。 ・進路探究で、自分の進路について深めることができたが、入試制度について、各自がもう少し掘り下げることができた。	・共通テストで、全国平均を上回り、かつ6割以上をとれる教科指導力充実の促進。 ・岡山大学を中心とした国公立大の二次試験に対応できる教科指導力充実の促進。 ・難関大学を目指す生徒への個別指導の充実。 ・総合型選抜や学校推薦型選抜も活用した進路指導の充実。 ・キャリアパスポートを「セルフインタビューブック」に改め、Mirano手帳と一体化する。そのことで、必要な時にいつでも記録し、いつでも振り返ることができるようにする。 ・各種講演・講座の実施による生徒の将来に資するキャリア教育の充実と、進路意識の高揚を図り、進路目標達成を目指す。	A評価 ・国公立大合格率55%(171名)以上 ・岡山大学合格者数45名以上 ・難関大学合格者数6名以上 B評価 ・国公立大合格率50%以上 ・岡山大学合格者数40名以上 ・難関大学合格者数5名以上 A評価 ・ほとんどの生徒が自分の納得のいく進路選択ができている。 B評価 ・7割程度の生徒が、自分の納得のいく進路選択ができている。	○ 3年生6月マークからの分析 ・平均点偏差値50以下・・・数ⅡB、地理B、化学 ・平均点55点以上・・・世B、英L、現社 ・岡山大学志望者（合算）C判定以上70名 ・神戸大学志望者（合算）C判定以上5名 ・九州大学志望者（合算）C判定以上7名 ・大阪大学志望者（合算）B判定以上1名 ・名古屋大学志望者（合算）B判定以上1名 ・国公立大学志望者（第1志望）283名 / 310名 ○ 各教科（英、数、国、物、化）で検討会前にアセスメントテストの実施。 ○各教科（英、数、国、物）での添削指導の実施。 ○国公立大学総合型選抜9月出願予定者22名（昨年度同時期25名（うち12名合格）） ○各種講演会・説明会の実施（岡大生が語る会、香川大学創造工学部、徳島大学など） ○1年生で学習時間実態調査を冊子にし、定期的に行うことで、学習時間の推移の見える化、改善につなげた。 ○各学年で模試分析を行い、反省と次回に向けてを学年で共有して取り組んだ。	B	○ 共通テスト結果からの分析 ・平均点 文系 535.9 理系 523.0 全体 528.0 （昨年度文系 529.3 理系 526.3 全体 527.5） ・過去回比較 文系 2年2月 417.6 3年6月 458.8 3年9月 472.9 3年11月 474.9 理系 2年2月 434.8 3年6月 454.7 3年9月 483.7 3年11月 463.2 全体 2年2月 428.0 3年6月 456.3 3年9月 479.2 3年11月467.8 ・各教科の状況 ・平均点が60点（120点）を超えた教科・・・国語、英語、日本史、世 界史、地理、現社 ○ 現時点での入試結果からの分析 推薦入試結果 43/91 未 74 ・総合型選抜（KTなし） 12/25 ・総合型選抜（KTあり） 0/2 未 20 ・学校推薦（KTなし） 31/64 ・学校推薦（KTあり） 未 28(+26=54) ・岡山大学 11/25 未 35 (+2=37) ○ 難関大について ・共通テスト700点以上 9名 ・共通テスト670点以上 15名 本人の志望、2次力にもよるが、難関大候補になってくる。直前12月のプレでは700以上は1人、670以上は3名だったので、上位層も点数を伸ばしてきている。	B	○ 共通テスト結果から ・全国に平均点が上がることは予想されるが、過去年度比較、過去回比較から段々と点数を伸ばすことができた。 ・これまでで1番多くの教科が、共通テストで目標としていた6割を超えることができた。 ・理科、数学が伸び悩み、それが理系の平均点にも影響している。特に今年度は数Ⅲ離れ、理科の専門離れが例年より多く目立った。教科で分析をし、普段の授業を通して結果に結びつくような授業改善に取り組む必要がある。 ・学校全体として、共通テストで6割かつ全国平均をクリアすることを一つの進路の指針としていきたい。 ○ 入試結果から 昨年度 推薦入試結果 78/153 ・総合型（KTなし） 12/25 ・総合型（KTあり） 13/27 ・学校推薦（KTなし） 37/65 ・学校推薦（KTあり） 16/36 ・岡山大学 35/56 （KTなし 26/36 KTあり 9/20） 全体の数でいうと去年の実績まであと35名で、発表未定が74名なので届かない数ではない。今年は岡山大学の学校推薦型（KTなし）が厳しかった。口述試験が課されるため、数学・理科の基礎学力が大事になってくる。
図書課	・探究的学習，キャリア教育に関する図書の充実 ・図書資料，図書館設備の授業での活用	貸し出し冊数は23年1月上旬で3900冊。貸出し利用者率 1年生＝96% 2年生＝22% 3年生＝27% 全体＝48%	・生徒と教職員双方を対象に蔵書や設備等の案内。書籍や情報検索の支援ができることを紹介。 ・授業での図書館利用を促す。 ・進路選択の参考となる図書や資料の利用を進路課と共同して促す。 ・図書館利用の実例紹介。 ・県立図書館との連携(継続)	・授業での図書館利用3科目以上。 ・貸し出し冊数(昨年度約３９００冊)、貸出し利用率(昨年度48%)の維持。(A評価：昨年度を上回る) ・情報検索にICTと書籍の両方が利用できる。	・8月までの貸出利用率32%、貸出冊数1704冊。（昨年同時期 貸出利用率32%、貸出冊数1831冊） 月別の貸出冊数が安定して推移している。授業や調べ学習での利用を促したり、新刊などの案内を進めていく。 ・3年生の志望理由書作成に際して図書利用を促している。	B	・3年生向けに小論文や職業紹介の書架を入口近くに設けたり、各書架のテーマを掲示するなどして、図書館を利用しやすい工夫をした。 ・書籍の更新を進めて最新の情報が得やすい環境を整えつつある。 ・12月末時点での貸出利用率は40%、貸出冊数約4700冊。貸出冊数は延びたが貸出利用率は下がった。例年、2年生の貸出しが少ない（昨年474冊、今年９９２冊）。	B	・他校でも一人一台端末実施以後、貸出し数は激減していると聞く。生徒のリクエストは漫画雑誌、ラノベに集中しており、貸出し数は最早目標とはなり得ないと感じる。貸し出し冊数に固執することなく、長く読み継がれる良書を書架に並べたいと思う。 ・
情報管理係	・セキュリティの保たれたネットワークを維持する。 ・Chromebookの活用，ICTの活用の環境を整備する。	・校内の対策基準の作成から県の対策基準も変更されており，順次見直しが相当。またChromebook関連の校内ルールも新たな視点での見直しが必要になると思われる。 ・Chromebookの導入によるICT活用促進と合わせて，教室のWindows機の更新や環境整備が必要である。 ・校内の行政系ログインサーバーを廃止し、県のmomoサーバー利用へ移行。校内のファイルサーバーはNASとする。	・岡山県情報セキュリティ対策基準に則って本校の対策基準を見直し，実施を行う。 ・各教室のPCやPC周辺機器の管理，更新の検討を行う。 ・Chromebookを活用した遠隔授業等に対応できるノウハウの提供を行う。 ・行政系がmomoサーバーへ移行する。	・Chromebookを含めてPCやサーバーの整備・管理・更新が行われた。 ・Chromebookが授業や校務で十分に活用されている。 評価Aの基準：PC更新予定が達成され、校内のネットワークの運用ができた。	・Chromebookの管理を行っているが、貸し出し用のChromebookについてのルール作りが求められている。 ・サーバーの更新は取りやめてファイルサーバーをNASに移行中。ログインサーバーは県のMOMOサーバーに移行中。 ・行政用のPCは古いものから更新、またはHDDをSSDに変更しつつある。	B	・Chromebookにログインできない事象が多数起こった。県の対応マニュアルにしたがって対応。 ・サーバーの更新は取りやめてファイルサーバーをNASに移行。 ・ログインサーバーを廃止し、県のMOMOサーバーに移行。 ・行政用の古いPCを順次更新した。	A	・貸し出し用Chromebookについての貸し出しルール作りを検討する必要がある。新年度から運用できるように検討したい。 ・公開系のサーバーの容量を確保するためにNASを導入することを検討している。来年度実施したい。 ・古い行政系PCのHDDをSSDに更新については、来年度も引き続き取り組みたい。
主権者教育担当	・政治的教養を育む内容のLHRの企画・運営 ・選挙や政治への関心を高める働きかけ	・R4の学校評価アンケート生徒評価指数3.5。あてはまる，ややあてはまるの計が1年79%、2年67．5%、3年79．3%となっている。 ・2年の評価が低いのは、事前の準備不足でLHRがリモートになったことがあげられる。	・政治的教養を育む内容のLHRの企画・運営 ・選挙や政治への関心を高める働きかけ（ポスター掲示、終礼伝達を使って啓蒙する）	・「学校では、選挙や政治への関心を高めたり、社会問題について学ぶ機会がある」の生徒評価指数が３．５ 評価Aの基準：生徒評価指数４．０	・LHRは2学期に実施。 ・4月当初の統一地方選に関して、市選管より啓蒙用に配布されたポスター、チラシを掲示した。	B	・3年生は10月にLHRを実施。 ・1年、2年は1月末に実施予定。県から提示されている教材を参考に担当者が独自の教材を作成し、生徒の興味・関心が高まるように工夫をしている。 ・岡山市より依頼があったポスター掲示をするとともに、生徒会の担当者と連携して、新たな取り組みができるか検討中。 ・生徒評価指数4.1。昨年度より0.6ポイントアップ。	A	・生徒課、選挙管理委員会との連携をして、生徒会選挙へ関わりを持つようにする。 ・主権者担当教員連絡協議会で、他校の取り組みを共有し、より本校の実態に合った教材を作成し、LHRを充実させる。
1年団	「自ら求める基本的学習習慣の確立」 ①予習・授業・復習のサイクル確立 ②家庭学習時間確保（平日180分、休日240分） ③Chromebookの有効活用 「進路実現に向けた適切な文理選択・科目選択」 ①分野別説明会の実施で大学のことを知る ②進路の方向性を決める		・授業に集中しやすい雰囲気を作る。 ・Chromebookを活用して自宅で予習、復習がしやすい環境を作る。 ・担任面談の年5回実施。成績上位者、下位者に学年主任面談を行う。 ・大学に関する情報提供を行い、進路の方向を定めさせる。	・基本的学習習慣が確立している。→学習実態調査で評価 評価A・・・学習実態調査の週平均がいずれも180分 評価B・・・学習実態調査の週平均がいずれも160分 ・進路実現に向けた適切な文理選択・科目選択が行われている。→独自アンケートで評価 評価A・・・独自アンケートで肯定的な評価が80%以上	学習実態調査 第1回 平日145.0 休日289.6 第2回 平日188.8 休日324.8 第3回 平日203.9 休日375.3 第4回 平日109.0 休日133.1 第1～4回平均 平日161.7 休日280.7 評価B＋ ①選択予定の文理選択、科目選択は自分の進路に十分に沿っている。29.0% ②選択予定の文理選択、科目選択は自分の進路に沿っている。61.9% ③選択予定の文理選択、科目選択は自分の進路にあまり沿っていない。8.2% ④選択予定の文理選択、科目選択は自分の進路に全く沿っていない。0.9% ①②計90.9% 評価A	B	令和5年度学校評価アンケート（1年生徒）評価指数 基礎的・基本的な教科指導がなされている。 R4 7.1→ R5 7.1 必要に応じて個々の生徒に対応した教科指導がなされている。 R4 4.9→ R5 4.9 Chromebook等のICT機器を使うなど、授業に工夫がなされている。 R4 6.5→ R5 7.2 授業では講義だけでなく話し合ったり発表したりする機会がある。 R4 7.9→ R5 8.1 進路決定に向けて情報提供や面談など、きめ細かい指導が行われている。 R4 5.5→ R5 6.1 大学との連携事業や講演会など、進路実現に関する行事が充実している。 R4 5.6→ R5 5.6 3項目で昨年度より評価指数が高い結果となっている。	B	・学校評価アンケート（1年生徒）において「Chromebook等のICT機器を使うなど、授業に工夫がなされている。」「授業では講義だけでなく話し合ったり発表したりする機会がある。」「進路決定に向けて情報提供や面談など、きめ細かい指導が行われている。」の項目で昨年度より評価指数が高い。これは各教科担当者がICT機器を活用したり、グループ活動を取り入れたり、様々な工夫をしながら授業を行っている結果といえる。また進路指導課が作成した週刊大学ジャンプを発行したり面接週間で担任面談を行ったり、進路決定に向けたきめ細かい指導が行われたことがあげられる。 ・校外模試偏差値は国語7月53.0→11月54.6、数学7月54.5→11月53.5、英語7月52.8→11月54.1、国数英偏差値7月54.0→11月54.6 の成績であった。授業の工夫が成績の維持につながっていると考える。2年次でも成績維持向上に努める。
2年団	「国数英を中心にした5科の学習習慣定着と学力の向上」 ①国数英で毎日180分以上の学習時間を確保し，プラス地歴・理科の学習を取り組ませる。 ②個別に得意科目，苦手科目を把握し，個に応じた学習計画が自分で立てられるよう指導する。 「志望校(群)の決定と大学の特色を知る」 ①課題探究・課題研究での活動を通して，大学卒業後を見据えた自らの姿をとらえさせる。 ②全国の大学の情報等を収集し，岡山大学だけでなく，幅広い大学選択の視点を与える。 ③2年生3学期までに志望校群を決定させる。 ④進研模試の成績上位者を対象に，個別指導等を行い，難関大受験者を育成する。	・1年生1月の学習実態調査では週平均172.3分， 1日平均では国語35.0分，数学67.0分，英語49.5分であり，3教科で180分には至っていない。地歴・理科の平均学習時間は，両者で約15分/日である。 ・進研模試では国数英総合全国SSは，7月52.5→11月53.4→1月54.7と上昇傾向である。一方，全国SS70以上が5名，60以上70未満が47名となっている。地方国公立大合格一歩手前に大きな集団があり，難関大を目指せる層も少ないが一程度存在している。 ・明確な志望校(群)が定まっていない生徒がいる。 学部は決まっているが，学科や専門内容までは決まっていない生徒が多い。有効な情報を入手する術を知らない生徒が多いため，調べ方も教える必要がある。	・課題の目的を理解させた上で，その提出を徹底させる。 ・5教科バランス等をみて，国数英の基本3教科の苦手を克服し，地歴・理科の学習時間を確保させる。その指導のために年間5回の担任面談を実施する。 ・全国の大学で研究されている内容などの情報収集の方法を学び，自ら幅広い選択の視点をもって情報収集出来るよう指導する。そのために課題探究・課題研究の活動内で先行事例研究を行い，夢ナビプログラムの利用などをすすめる。 ・積極的に課題探究・課題研究に取り組ませ，自身の進路との関連性や方向性を明確化させる。	「国数英を中心にした5科の学習習慣定着と学力の向上」 （学習時間の増加，成績上位層の増加） 評価B⇒学習実態調査(3回)の週平均がいずれも160 分以上である。 評価A⇒学習実態調査(3回)の週平均がいずれも180 分以上である。 「志望校(群)の決定と大学の特色を知る」 （志望校(群)が決まっている，大学について幅広く考えられている） 評価A⇒3学期志望校調査において，第一志望(群)が決まっている生徒が80%を越えている。 ＜どちらも評価Aがついて全体評価Aとする＞	・学習実態調査（7月）では1日平均が238.1分と1年1月時に比較し大幅に上昇している（定期考査前での調査）。定期対策としての学習意欲の高まりは見られる。 ・2年7月進研模試では3教科全国SSは53.9と入学以降初めての下降となった。B1からそれ以下への増加が見られ、成績中間層からの下降が見られる。 ・年団会議にて情報を共有し、対策として個別面談の実施を行った。	B	・学習実態調査（10月）では1日平均が２０７分と前回に比較し低下した。教科別では理科の学習時間が少なく、全体的に理系の学習習慣にまだ不十分さが残っている。 ・2年11月進研記述模試では3教科全国SSは53.1、GTZでもB1→B2に下降しており、中だるみの状況を反映している。2学期末では個別面談を実施し、合わせて学年集会で学習に向けての動機付けを行った。 ・1月進研記述における志望校では9割の生徒が第1志望を国公立大を志望、岡山大学だけで約5割を占めている。ただし第4志望まででD・E判定だけの生徒が44%いる一方、A・B判定なしが72%と多く志望に学力が追いついていない生徒が多い。	B	・進研記述でのB1の層がB2へ移動しており、中盤層の学力低下が特に理系生徒で目立つ。予習や課題提出など通常の学習習慣の定着徹底を狙っていく。 ・進路探究プログラム（ベネッセ）など新課程入試を含めた大学情報を自分で調べて理解する取り組みを3年次の進路探究でも充実させる。 ・授業解説動画などは生徒にも好評であり、自学自習に向けてのモチベーションが高い生徒も多い。基礎基本の理解徹底ができる取り組みを考えていきたい。
3年団	「自分史の作成」を通して，「受験校の決定」を行い，生徒の「進路実現」を行う。	【2年生3月時点での状況(課題)】 ・国公立大学志望者は約84%である。進路志望の学部学科が明確に決まっている生徒は約59%で あり，「今悩んでいる」という生徒が約38%である。また，希望する校種について学べる内容やできる研究について，しっかりと調べているという生徒は約63%であった。校種は決まっているが，自分の学びたい学問は明確には決まっていないという生徒が多い状況である。 【改善の方向性】 ・LHRや進路探究の時間を通して、志望する大学 学部学科と志望理由、大学での学び、卒業後のキャリアについて考える。	①「自分史の作成」 ・進路探究を通して、自分史を作成させ、生徒相互面接(個人・グループ)を通じて、進路先で取り組みたいことなどを明確にし、受験校決定につなげる。 ②「受験校の決定」③「進路実現」 ・進路通信を活用し、大学、学部、学科についての情報提供をする。 ・担任、教科担当、学年主任などによる面談を実施し、幅広い選択肢を与える。 ・自己分析を行わせ、自身の特性にあった入試を選択させる。	【達成された姿】 ①②③を総じて Ⅰ．「学べる内容やできる研究についてしっかりと調べている」生徒が多い状況となる。 Ⅱ．「志望進路の学部学科が決まっている」生徒が多い状況となる。 【評価規準】 評価B ⇒ Ⅰ，Ⅱともに80%を越えている。 評価A ⇒ Ⅰ．Ⅱともに90%を越えている。	Ⅰ．約79%の生徒が調べられていると回答。 志望する大学は調べられているが、模試等の成績相当の大学については、まだ調べが不十分である。 Ⅱ．約92%の生徒が学部学科は決まっていると回答。 学部学科についてはほとんどの生徒が決まっているが、成績面から受験を考える大学については今後も調べる必要がある。	B	Ⅰ．約94%の生徒が調べられていると回答。 Ⅱ．約97%の生徒が学部・学科は決まっていると回答。	A	＜結果分析＞ 進路探究において、志望学群ごとに分かれて活動したことが、大学や学部・学科について深く考える良い機会となったことが、生徒の感想からも見てとられた。 専門学校、私立大学、国公立大学と幅広い進路志望に対応した指導をすることができた。 ＜改善点＞ 良い取り組みであったと思うが、もっと時間を割いて研究室等についても調べる時間がとれればよかったと感じる。また、調べたことをしっかりとデータや資料として保存することを指導できれば、なお良かった。

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	結果分析・改善策

(3) 安心・安全な学校生活の保障（ 総合評価：Ｂ ）

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	結果分析・改善策
教務課	・生徒の主体的，自律的に行動の活性化。	①9月中旬から、クロムブックで時間割変更を含む連絡事項を配信するシステムに改変し、好評を得た。 ②ノーチャイムデイを年5日以上実施した。 ③「ホームページや楽メ、連絡文書を通じて、必要な情報を受け取ることができる」によくあてはまると回答した生徒は39.8%(あてはまるまで含むと、91.5%)であった。 【改善の方向性】 ②ノーチャイムデイが生徒の自律的に行動する力を育成できたかどうか検証するために、生徒アンケート等を実施し効果的な運用方法について検討する。 ③問いに「クロムブックや」が入っていれば、より高評価だったと思われるため、今年度のアンケートには記載する。	・クロムブックを活用した連絡事項の伝達を推進する。 ・終礼,清掃カットの曜日を設け、時間のマネジメントを促す。 ・ノーチャイムデイの効果的な運用について計画・実施する。	・主体的に学校生活に必要な情報や得ることができ、自律的に行動をすることができる。 評価Aの基準 ・学校評価アンケート4S2の評価指数が昨年度を上回っている。	・終礼連絡以外にも、全体に係る情報共有などをClassroomで発信できている。 ・今年度より、火・木の終礼清掃を廃止し、放課後の時間を有効に活用できるようにした。 ・短縮時間割となる始業式、夏季補習期間、学力診断テストなどをノーチャイムデイとした。	B	①終礼・清掃の曜日廃止は生徒に好評であり、来年度も継続したい。 ②昨年度同様、ノーチャイムデイを年複数回実施した。ただし、これにより、生徒の自律的に行動する力を育成したとはいえないのため、主体性を育む有効なあり方について引き続き検討を行う。 ③「ホームページや楽メ、連絡文書を通じて、必要な情報を受け取ることができる」によくあてはまると回答した生徒が昨年度を上回った。 □	A	・環境整備について、生徒の要望から「自習教室の拡充」や「復習用の動画教材」などがあり、来年度にむけてさらなる環境整備を進めたい。
生徒課	・基本的生活習慣の確立を図る ・自主性を育てる ・人間性豊かな心を育てる	・学校行事や研修会をとおして，生徒の主体的な活動を促し生徒自ら「ルールやマナーの遵守」や「時間の管理」，「けじめのある服装，爽やかな挨拶」など，当たり前のことが当たり前にできる集団をめざして指導を続けてきたが満足できる結果に届かなかった。多くの評価項目で目標値は超えたものの評価Aには至っていない。 ・多くの生徒は，学校生活を充実したものにし，学校行事やボランティア活動に取り組んでいるが，中にはやらされている，強制されている等の思いを持つ生徒もいることから，学校行事や社会貢献活動の意義や目的を考えさせ，生徒全体の取り組みとなるよう指導していきたい。 ・昨年度は，特に力を入れて取り組んできた制服の改定に伴う「人権に配慮した行動」についての項目での生徒評価が下がったことから，「人権に関すること」「命に関わること」を中心に生徒の意識の向上や行動改革につながる取り組みを行っていきたい。	・学校行事やあいさつ運動，ノーチャイムデーなどを通して，ルールの遵守や時間の管理，けじめのある服装，爽やかな挨拶など，当たり前のことが当たり前にできる集団を育てる ・生徒会執行部の活動を支援することで，部活動や委員会活動，各種行事への主体的な取組みができる人間を育てる ・新制服の導入に伴い，服装規定の見直しを行うとともに，校則の見直しを行うこととしている。 ・ネットケータイ安全教室やいじめ調査アンケート等を実施することで，互いの人権を尊重し，いじめを許さない集団を育てる	学校評価アンケート ・「学校行事は充実したものとなっている」「クラスにおける活動は充実している」の項目で肯定的な評価が85%以上。（A基準：90%以上） ・「生徒会活動や委員会活動は活発である」の項目で肯定的な評価が80%以上。（A基準：85%以上） ・人権教育の項目で，肯定的な評価が80%以上。（A基準：90%以上）	・交通ルール，マナーに関しては地域からの苦情も多く改善には至っていないものの，命に関わることでもあるため，生徒への注意喚起や交通立ち番を行うなど引き続き粘り強く指導を続けていく。 ・スマートフォンの利用について，ルール違反が増えつつあるので，利用ルールの徹底を図る。 ・銀杏祭文化の部、体育の部ともに入場制限を緩和し，保護者が参加しての開催ができた。 ・今年度は銀杏祭文化の部、体育の部とも生徒会が主体となって取り組みを進め，当初の計画どおり生徒主体の活動ができた。 ・現在，生徒会を中心とした「校則検討委員会」において校則の見直しを行っている。 ・教職員研修において，「インターネットトラブルの事例と対策」について研修を行った。 ・今後，いじめ調査アンケートや面接週間での聞き取りなどを行い，いじめを許さない集団をめざしていきたい。	B	・学校行事や学年行事がコロナ対策の緩和により，コロナ以前の活動に戻りつつある中で，「学校行事は充実したものとなっている」の項目に関しては生徒の肯定的な数値が減少した。（89．1%から84．2%）逆に，「クラスにおける活動は充実している」の項目では増加している。（85．6%から89．3%） ・今年度の銀杏祭文化の部，体育の部ともに生徒会と文化委員会，体育委員会が主体となって取り組みを進め，当初の計画どおり生徒主体の活動ができたが，「生徒会活動や委員会活動は活発である」の項目で評価が下がっている。（77．2%から74．1%） ・インスタグラム等のSNS関連のトラブルを防止するため，「インターネットトラブルの事例と対策」について研修を行った。 ・いじめ調査アンケートの結果、いじめを見た・聞いた等の訴えは，調査開始以来確実に減少してきている。しかし、ゼロではないため引き続きいじめを許さない集団をめざしていきたい。「人権意識を高めたり，人権問題について正しく学ぶ機会がある」の項目について数値が上昇した。（80．7%から82．5%）	B	・コロナ対策の緩和を受け，学校行事や学年行事，クラスでの活動等の学校生活がコロナ前に戻りつつあるころから，生徒指導に関する評価は前年度に比べ多くの項目で上昇している。生徒の活動が元に戻りつつあることが実感できている。学校生活をコロナ以前の状況に戻すための準備を進めていく。 ・学校自己評価アンケートの結果が下がった数少ない項目である。行事自体は入場制限など，若干の制限を設けたもののほぼ予定どおりに実施することができた。この中で，生徒会執行部や委員会の活躍があって実施できているにも関わらず，彼らの活動が生徒に浸透していなかったことが原因である。 ・人権に関するアンケート項目に関しては，肯定的な数値が上昇しているが，SNSを介してのトラブルが依然として見受けられることから，SNSの適切な使用についての指導機会を増やしていく必要がある。また，引き続きいじめを許さない集団をめざしていきたい。
厚生課	・基本的な生活習慣を確立させ、健康意識を高め、疾病予防などの自己管理ができる。 ・心身の健康への意識を高めるための、保健LHRを実施する。 ・防災意識を高め、災害時に適切な行動ができるように防災訓練を行い、防災冊子の作成をする。	・身体計測、各種検診は正しく実施できている。治療指示書の提出率は県平均と比べて十分高い。配布後の個別指示などを適切に行うことで現状を維持していくことが大切。 ・保健LHRは正しく実施されており、生徒の健康意識を高めることにつながっている。講師や実施方法を考えながら、さらなる意識高揚へつながるような保健LHRを実施する。 ・新型コロナ感染症のため、十分な避難訓練が実施されていない。しかし教室などでの活動により防災意識は高めることができた。防災冊子はChromebook上での配布となった。いつでも携帯端末から見ることができ、より利用しやすくなっていると思われる。	・身体計測や各種検診を行い、自分自身の健康状態を十分に理解させる。検診結果を伝え、必要なものには治療指示書を渡し通院を促す。 ・講師や実施方法を考えながら、意識高揚へつながる保健LHRを実施する。 ・防災訓練や防災冊子の作成を適宜見直しを行いながら実施し、教職員や生徒の防災意識の高揚をはかる。	・すべての計測、検査が正しく実施でき、治療指示書の配布や受診指導が十分に行われ、生徒自身が自己管理ができるようになる。 A基準：治療指示書の提出率70%以上 ・保健LHRを実施することで、生徒の健康意識が高まる。 A基準：生徒による健康意識に関するアンケートで肯定意見90%以上 ・状況に合わせた防災訓練を実施し、生徒の防災意識が高まる。防災冊子を完成させ職員へ配布する。 A基準：生徒による防災意識に関するアンケートで肯定意見90%以上かつ防災冊子の完成	計測、検査は正しく実施できた。治癒指示書の配布も行われているが、回収はまだ十分でない。 （現在、約50%） 10月、11月で実施予定 防災冊子は完成しており、職員は携帯端末で確認することができるようになっている。 防災訓練は5月に実施し、次回10月に実施予定。生徒アンケートはその後に取る予定。	B	計測、検査は正しく実施できた。治癒指示書の配布も行われており、回収は進んでいる。しかし、眼科49.7%、歯科68.1%と目標の70%を越えなかった。 保健LHRは計画通りに実施された。終了後の健康意識に関するアンケートでは1年、2年共に肯定的な意見が90%以上であった。 愛関係の資料は確実に作成された。防災訓練を2回行い、終了後の防災意識に関するアンケートでは防災意識向上がうかがえる意見が90%以上であった。	B	実施すべきことについては計画通りに実行することができた。また、アンケート結果からはそれぞれの効果が感じられるものとなっている。必要なことを確実に行いつつ、内容については状況に合わせ更新していくことを考え、生徒の安全健康に関する意識を上げていきたい。
図書課	・安心・安全な学校生活の保障 ・生徒による主体的，自律的な行動の活性化	・文学散歩を実施できた。 ・図書館ギャラリーや掲示板を利用して、美術や英語の作品や制作物の展示を実施した。 ・館内の照明を更新して明るくなった。 ・書架の配置を変えて見通しが良くなった。	・感染防止対策の遵守 ・創立記念行事などの企画立案実施 ・図書委員会などでクロムブックの活用促進 ・部活動の成果物展示と掲示	・校内行事に委員会として参画。 ・全校生徒対象のアンケートによる来館者数40%以上。（A評価:50%）。	・文学散歩（県立博物館）は天候にも恵まれ無事に実施できた。 ・創立記念行事に向けて準備が進んでいる。図書委員会の文化祭展示でもAMDAをテーマに行い、非常時にすべきことやできることについて知識を増やしたい。 ・来館者数は8月末時点で70%を超えている(クロムブックによるアンケート結果717/807(人)）。	B	・創立記念行事講演会では、講演した菅波先生への質問が相次ぎ予定の時間を超え先生からは高い評価を得ることができた。しかしその質問の質が揃わなかった。 ・委員会活動の後期から学級文庫を開設したり、10月下旬からの読書週間で借出しスタンプラリーを新しく導入したりして、図書委員が主導して全校生徒が書籍に触れる機会を作り、貸し出し率を高める工夫を実現することができた。 ・12月に吹奏部主催で図書館コンサートを開催できた。想定以上に多くの生徒が来館し盛況となった。	B	・講演は概ね好評だったが、質問内容で質問者のレベルも測られていることを自覚させたい。 ・新型コロナ感染症が5類に移行したことや再来年度はシンフォニーホールが改装工事に入ることを踏まえ、行事の開催場所を検討したい。 ・教室に入りにくい生徒のシェルターの一つとして、今後も機能させたい。 ・来館者数と貸出し冊数に大きな差がある。
教育相談室	1．生徒や保護者に対して安心で きる場の提供，精神的サポート及び人間関係の調整。他機関との連携。安定した学校生活の支援。 2．学校全体の支援体制を整える。教職員間の連携を図る。 3．多様な生徒の理解，支援の資料，相談の場の提供。	・中学校，保護者との連携に努め，入学前の情報収集に力を入れている。（サポートシート） ・発達障害の有無，学校生活で配慮すべき生徒についての情報が得られている。 ・心理検査i-check（1年生・2年生)Ai-grow(3年生）の分析。学年，クラス状況，要支援生徒(注視すべき生徒)の顕在化と共有をしている。 →R5は3学年共にi-checkを受検する。 ・相談室係会での情報交換，学年団へ繋げる。	・定期的に月１回相談室係会(相談室長，特別支援コーディネーター，学年主任，養護教諭，学年相談室係，SSW)を開き，欠席状況，SC面談内容等の情報交換，共有。 ・SSWの相談室係会への参加調整。外部相談機関の紹介，注視案件の対処方法など相談。 ・1・2・3年生心理検査i-check(5月，11月)を実施予定。家庭，学校での居場所，その居心地，親子・友人関係の把握。不登校，人間関係の孤立を防ぐ支援。 ・生徒課と連携。いじめ防止・早期発見に努める。 ・教員研修（合理的配慮等、教育相談）7月実施。	・サポートシートを活用した中高連携，保護者と情報共有ができている。 ・月1回の相談室係会での情報交換や迅速なケース会議の設定により,問題の深刻化を防止し,担任,生徒，保護者へ心的負担軽減を図る支援ができている。 ・HP等を利用した相談室活動の広報ができている。 ・心理検査(i-check)を用いた生徒把握ができている。親子関係の把握，不登校，孤立防止,生徒の自立・自己肯定感を高める援助ができている。 ・生徒課と連携し，STANDBYの情報注視をすることで，問題の早期発見ができている。 ・職員研修を実施している。 A基準：「学校評価アンケート」教育相談項目において、生徒・保護者・教員ともに、肯定的な評価が85%以上。	・入学前、中学校の先生と「気になる生徒情報」について情報共有する場を設けている。（電話または来校） ・月毎の欠席調査等で、配慮が必要な生徒の動向を把握し、関係教員で共有している。 ・SCや学校医が行うカウンセリング情報を共有している。 ・問題を抱えている生徒についてのケース会議や個別面談、関係外部相談機関との連携など、各方面から支援を行っている。 ・相談室係会（SSWも参加）を月１回定期的に開き、全学年の注視すべき生徒についての情報共有を行っている。さまざまな悩みを抱える生徒それぞれの、心的負担軽減を図る支援を、多面的に行っている。 ・スクールカウンセリング日程など教育相談に係る情報をHPへ掲載している。 ・心理検査(i-check)1回目は5月に実施した。生徒の状況把握資料として、本人・保護者に個人シートを配布している。担任も一つの視点として参考になる部分もあった。 ・生徒課と連携し、STANDBYの情報から、問題を抱える生徒の早期発見ができている。 ・7月に教職員対象の校内研修「高等学校における合理的配慮」（講師：就実大学　岡田信吾先生）を実施した。	B	・相談室係会を月1回、年12回実施。係会メンバーとSSWで学校全体の注視すべき生徒について情報共有を行った。 ・昨年度作成した欠席調査フォルダへ各クラス担任入力をお願いし、配慮が必要な生徒の動向を共有するとともに、県調査への正確な報告を行った。 ・SC、SSW、学校医と連携し、精神科医療機関との情報共有や外部相談機関の紹介・対応方法などの助言を行った。 ・カウンセリングを希望する生徒の増加に伴い、SCを年間15回実施とした。生徒対応に必要な情報共有のため、コンサルテーションに担任が参加する形をとった。 ・教職員研修「高等学校における合理的配慮」（講師：就実大学　岡田信吾先生）実施。合理的配慮についての基本的な知識について理解を深めた。 ・問題を抱えている生徒や不登校生とを持つ保護者との面談や電話相談を行ったり、SCやSSWの紹介と連携を行ったりした。 ・全学年対象とし、i-checkを5月と10月の2回実施した。注視する生徒の明確化と変動の共有を行った。生徒個別シートは保護者と生徒に渡した。また、担任にはクラス資料を配布した。 ・HRやラクメで、スクールカウンセリングや心の健康相談の日時案内を行った。 ・「学校評価アンケート」教育相談項目20において、評価指数は前年度より向上した。しかし、肯定的な評価がT20において98．1%の高評価であるものの、P14においては67．9%、S15においては84．3%である。数字だけでは測れない側面もあるが、「生徒や保護者が相談しやすい場」を目指したい。	A	入学時に発達障害など診断のある生徒も増加傾向にあり、年度途中に「起立性調節障害」や「鬱」の診断がおりた生徒もいる。また、自らの力で他者との関係を改善したり、再構築することができない生徒の増加も観られる。相談内容も多岐にわたり、それぞれの特性や事案にあった対応を求められているのが現状である。 今後強化するべき点は、職員研修やi-check（心理検査）などを通して、支援が必要な生徒について日々の観察や対応方法を教職員で共通理解すること。また、不登校傾向のある生徒へのより良いアプローチ方法や保健室在室時間など、個々の生徒に応じて柔軟な対応ができるよう努めること。そして、専門的な助言を得られるよう外部機関との連携を密にすること。以上3点を中心に、教育相談室が生徒・保護者・教員など関わるすべての人がより良く生きていくための力になれるよう努めたい。
事務室	築40数年経過し、老朽化も進んでいるため、本庁担当課と協議しながら改善策を検討するとともに、中庭を中心に校内美化を推進するなど安心・安全で質の高い教育のための環境整備を図っていく。	○施設・設備の更新等に関して、要望の実現可能性も検討しながら、急を要する事案から計画的に修繕等を行うとともに、校内環境維持を進めていく。また、校内環境整備，安全防災に関する用具等の整備も行っていく。	○生徒・教職員の最優先に、危険箇所への早期対応はもとより、対応が求められている施設・設備についての実現可能性を検討していくとともに、校内美化環境の維持・管理についても促進していく。	○生徒・教職員の学習環境、安全確保の改善が図られている。 A基準：年度当初に計画していた以上の成果を上げられる。	○危険箇所の把握を随時行い、早期に改修を実施している。大規模な事案については、県に対し維持補修計画を提出し対応をお願いしている。校内美化については、今年度より専門業者による剪定、校舎内の床面・窓ガラス清掃を実施して校内環境の美化を進めている。	B	○危険箇所の改善だけでなく、教育環境の改善をテーマに第２棟トイレ改修、LL教室・合併教室の室内改修、シャッター設備更新、浄化槽ポンプ更新、階段手摺り設置等を実施した。校内美化については、樹木剪定・草刈りを季節ごとに実施した。汚れの目立つ第１棟廊下・階段、3年教室内、トイレの清掃を専門業者により実施した。 令和6年度においては体育館の照明器具のLED化だけでなく、校内各所の照明を更新する計画、情報機器の充実を策定しているところである。	B	○校内各所の老朽化が目立ち始め、予算の範囲内で随時補修、美化整備を実施しているが、生徒や保護者からの改修要望に予算が追いつかない実情がある。長寿命化工事が開始されれば解決する事案が多いが、県に対しては危険箇所を優先し、学習環境の改善が図られる事案から増額要望を継続していく。

(4) 外部から信頼される学校づくりの推進（ 総合評価：Ｂ ）

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具体的方策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	結果分析・改善策
総務課	校内外へ向けて，本校が取り組んでいる内容を，わかりやすく発信して，一高サポーター（保護者・同窓会・地域社会等）を増加させ，関係性をより強いものとする。中学生にとって魅力が伝わりやすい発信を目指す。	オープンスクールや学校説明会で上映する学校紹介動画を一新した。本年度は、県の教育政策課の「県立高校紹介動画制作事業」も活用し、中学生にとってわかりやすい動画を制作したい。 ホームページでは、複数箇所で情報が最新のものに更新されていないところがあった。年度初めに総チェックをかけて、各部署の協力を得ながら最新情報を掲載するようにしたい。 令和4年度にすべての部活動紹介ページの更新を行った。令和5年度は係から働きかけ、少なくとも半年に1度は更新していく。 学校公式のFacebook, Twitterを活用し，SNSを活用した情報発信も行っており、広報において効果的に機能している。 プレゼン内容は，各課等に協力をいただきながら改訂を繰り返すことで，わかりやすいものを作成できている。 感染症対策を行いつつ，学校説明会を2回，中学校教員対象入試説明会を1回，オープンスクールを2回実施した。人数制限を設けたため、参加希望者全員を受け入れることができなかったが、状況を見極めながら、できるだけ多くの中学生やその保護者にアピールするよう工夫したい。	1 ホームページの充実 (1)学校紹介動画のブラッシュアップ。 (2)部活動紹介ページを随時更新する。 (3)各学年・各課・各科・生徒会等との連携。 2 各種説明会への積極的参加と効果的なプレゼンの工夫 (1)学校紹介のプレゼン内容の再編集。 (2)各分掌，生徒会等との連携。 3 中学生やその保護者に本校の魅力が伝わるようなオープンスクールや学校説明会を計画・実施する。	1. 学校紹介動画が完成し、部活動紹介ページが随時更新されている。ホームページのどのページも新しい情報に更新されている。 2. プレゼン資料が中学生や保護者、中学校の教員等にとってわかりやすいものになっている。 3. 中学生やその保護者にとって、必要な情報が十分に伝えられたオープンスクールや学校説明会を実施できている。結果、一般入試の志願倍率が過去5年の平均倍率（1.31倍）を超える。 A評価：一般入試の志願倍率が過去5年で最高（1.36倍）。	1 ホームページの充実 ・教育政策課の「県立高校紹介動画制作事業」を活用し現在動画作成に向けて打ち合わせを進めている。現在シナリオが完成し、9月末に本校で動画の撮影予定。 ・ホームページは年度当初に更新した。しかし部活動紹介ページは更新が滞っているものもある。また、令和6年3月にホームページを刷新予定である。現在担当者が業者と打ち合わせを進めている。バーチャルパノラマツアーについても更新していく予定である。 2 効果的なプレゼンの工夫 ・中学生や保護者がどの時期にどのような高校の情報が必要であるかを分析するために、今年度入学した1年生に独自アンケートを実施した。その結果を基に説明を行っている。 ・塾や中学校主催の説明会では事前に担当者と打ち合わせを行い、中学生が必要をする情報を提供できるようにした。 3 本校の魅力が伝わるOS等の説明会 ・7月に2回、保護者対象学校説明会を実施した。エアコンを使用するため会場を体育館から変更し、研修室と会議室の2会場で実施した。 ・8月に第1回オープンスクールを実施した。中学3年生の生徒のみを対象とし709名の参加があった。在校生との座談会では1教室20名以内の制限を外し，コロナ禍前のような形態で実施した。 ・8月に中学校教員対象学校説明会を実施した。コロナ対策のため，カットされていた授業見学を復活した。保護者対象学校説明会で保護者のアンケートで評判の良かった「卒業生からのメッセージ」を編集し、「一宮高校を志望した理由」「一宮高校の魅力」についての動画を見ていただいた。	B	1 ホームページの充実 (1)学校紹介動画のブラッシュアップ。 教育政策課の「県立高校紹介動画制作事業」を活用し動画が完成し た。2月に公開予定である。 (2)部活動紹介ページを随時更新する。 4月、9月、1月に担当部署に呼びかけ改善されたが、すべてが更新されているわけではない。 (3)各学年・各課・各科・生徒会等との連携。 生徒会が中心となり、新しいホームページの企画ページ「一高生100人に聞きました」作成を進めている。アンケート調査を行い現在集計作業中である。3月にホームページが刷新される予定である。 2 各種説明会への積極的参加と効果的なプレゼンの工夫 (1)学校紹介のプレゼン内容の再編集。 中学校や塾主催の学校説明会に6回参加した。そのうち能開センターと鷗州塾、明修塾とは事前に打ち合わせを行い、参加者が聞きたい内容を踏まえて説明を行った。 (2)各分掌，生徒会等との連携。 オープンスクール、学校説明会等は教務課や理数科の先生方にご協力いただき実施することができた。 3 中学生やその保護者に本校の魅力が伝わるようなオープンスクールや学校説明会を計画・実施する。 オープンスクールや学校説明会の「理数科の取組」「入学者選抜」の説明についてのアンケートでは、いずれも参加した中学生及び保護者から90%以上の肯定的意見をいただいている。 12月1日の志願倍率は1.31倍である。	B	1 ホームページの充実 ・部活動紹介ページを随時更新する。 部活動紹介ページは、原則として校誌の原稿を年度末にアップする。特に困る部に関しては、事前に係まで申し出ていただきそれに代わる原稿を出していただく。年度初めには、これまで通り顧問に対して更新を促す。更新されなくても毎年最新の校誌のデータになっている。 また、次年度は教員全員が更新できるようにワードプレス研修を行う。 2 各種説明会への積極的参加と効果的なプレゼンの工夫 各種説明会は重要ではあるが、入学者のアンケートやオープンスクールに参加した生徒のアンケートからホームページと学校案内JoinUsの広報効果が高いと判断できる。次年度はホームページとリンクした学校案内作成に向けて検討する。 3 中学生やその保護者に本校の魅力が伝わるようなオープンスクールや学校説明会を計画・実施する。 オープンスクールは定員を設けている。部活動などは直接見学が必要になるが、説明などはオンラインや、現在理数科生徒が研究しているメタバースを活用した実施も検討する。
教務課	・タイムリーな学校情報の発信を行う。	・評価アンケートで「授業公開やホームページ、楽メ、連絡文書を通じて、学校の様子や必要な情報を得ている」に、よくあてはまると回答した保護者は37.8%(あてはまるまで含めると89%)であった。 【改善の方向性】 ・公開授業の見直しと周知方法の検討を行う。	・適切な時期を見極めながら、公開授業・授業参観の拡充に努める。 ・ラクメを通じて、保護者への情報提供を拡充する。 ・ホームページやSNSを利用した学校行事の予定や取組みの発信を行う。	・保護者、地域、教職員が連携を密にして協力して生徒を育てることができる。 評価Aの基準 ・学校評価アンケート32P18P19の評価指数が昨年度を上回っている。	・週末に学校行事の情報をラクメで発信している。 ・学期の行事予定、行事終了後の様子をホームページにアップしている。	B	①各学年1回以上の授業公開日を設けることができた。 4月は103名、11月の1・2年生は2日で104名が参観。 アンケートの集約も行い、好評をえた。 ②1年生とその保護者に学習評価について、情報提供することができた。 ③学校評価アンケート32P18P19 で「授業公開やホームページ、楽メ、連絡文書を通じて、学校の様子や必要な情報を得ている」に、よくあてはまると回答した保護者は昨年度を上回った。 □ □	A	・授業公開に参加した方のアンケートでは、授業公開の機会増加を要望する声が少なくないので、来年度はさらに充実をはかりたい。
厚生課	・地域の環境美化への貢献 ・地域防災への貢献	・クリーン作戦で地域の方にはおおむね好評を得ている。現在は活動場所や地域との交流が制限されていることと、比較的きれいな場所であったりすることで生徒の満足度があまり上がらない場合がある。生徒が充実感を得ることができ、継続して地域に貢献する意識が高まるような活動を実施したい。 ・岡山市緊急避難所兼避難所指定されている。実際に避難所として運用されてはいない。	・クリーン作戦などの機会を捉えて、社会貢献活動に積極的に参加する。 ・岡山市緊急避難所兼避難所指定として貢献する。	・地域と協力した環境美化活動の実施。 A基準：生徒による地域貢献に関するアンケートで肯定意見90％以上 ・岡山市、楢津地区からの要望・要請に、迅速に対応する。（評価の基準は設けない）	クリーン作戦を10月に実施予定 稼働実績なし	B	クリーン作戦は10月に東楢津遊園地集会所・神社、桜日和、若宮八幡宮、笹ヶ瀬川河川敷、平津小学校、きらめき荘の6か所で行われた。生徒の活動満足度は88%であり、昨年度より2ポイントアップしているものの90%には届かなかった。 稼働実績なし	B	生徒は一生懸命真面目に活動に取り組んでいた。活動時間や事前準備などにさらに工夫を加え、生徒自身がもっと考えて行動できるようにすることでさらに地域貢献への意識を高められる可能性がある。また、小学生と一緒の活動には人気があった。他者との交流を増やすことでも地域貢献への意識は高められると考える。
理数科	理数科が取り組んでいる内容について、校内外に発信し、理数科の特長を理解していただく	・学校ホームページの理数科のページが更新されていない。 ・ブログで理数科の取り組みを発信したが、生徒の感想等を盛り込むなど内容を工夫して、よりわかりやすい内容にする必要がある。	・学校ホームページの理数科のページを更新する。 ・理数科の取り組み内容を生徒の感想などを含めて学校ホームページのブログで発信する。	・学校ホームページの理数科のページが更新され、行事や学校設定科目の内容がわかりやすく公開されている。（A：理数科の全てのページが更新されている。） ・学校ホームページで理数科の記事のブログが年間10回以上発信されている。（A：15回）	・学校ホームページの理数科のページを更新するために、現在原稿を作成中である。また、現在のページにはないQ＆Aも作成する予定である。 ・理数科の取り組み内容を生徒の感想などを含めて学校ホームページのブログで発信を続けている。4月から8月までに生徒の感想も9回発信している。	B	・学校ホームページの理数科のページを全て更新し、以前のページにはなかったQ＆Aも作成して、理数科の内容がわかりやすくなるように工夫した。 ・理数科の取り組み内容を生徒の感想などを含めて学校ホームページのブログで発信を続けた。読んだ方が、充実した教育活動になっているとているという感想を持つように文を工夫した。4月から12月までに生徒の感想も12回発信している。3月までには、15回を超える予定である。	A	毎年12月1日付けで公開される進学希望状況第一次調査結果において、今年度は男子74名、女子35名、計109名が理数科を希望し、過去6年間において最高値となった。特に女子の希望者が増加しており、H31年の2.3倍となっている。R4年と比較して男女合わせて計36名の増加となった。様々な複合的な要因が考えられるが、今年度の広報活動も要因の一つと考えられる。 来年度も広報活動を工夫し、理数科に関する理解を深めていただくとともに、最終的に中学生の希望者を増加、または維持をしたい。
地域連携担当	地域の環境美化，防災，教育支援等へ貢献するため，町内会や公民館，近隣の小中学校との連携を強化する。（コミュニケーション力・自律的に行動する力・垣根を越える力）	・一宮公民館をとおして他の施設や団体との連携を深めることができつつある。コロナウイルス感染症が収束し，通常通りの活動ができるようになれば，交流の幅がさらに広がっていくと考えられる。 ・課題探究においては，地域の課題解決を目指した研究が少なくなっていることから，継続研究の推進やテーマ設定時での指導が必要である。	・一宮公民館との連携を核として，町内会や地元小中学校との連携を推進する。 ・地域の課題解決に向けた課題探究の推進を図る。	・地元の町内会や小中学校との交流ができる。 ・地域の課題解決を目指した研究や研修講座が実施できる。 評価Aの基準 ・地域の課題解決に向けたテーマでの課題探究が増える。（昨年度3本） ・防災や教育支援などの取組が地元町内会や小中学校とできる。（昨年度，コロナウイルス感染症の影響で中止）	・夏季休業を中心に、一宮公民館と連携した「防災ボランティア養成講座」や「パソコン講座」，「科学実験教室」等を実施できた。また，「防災ボランティア養成講座」には，地域の方にも参加していただき，地域と学校とで災害時に何ができるかを話し合いをすることができた。 ・コロナ禍で活動が制限された昨年までと比べ，多くの研修会や講習会に参加することができている。	B	・一宮公民館と連携した講習会が実施できた。また，町内会長さんをはじめ地域の方々を招いての研修会も実施できた。 ・コロナ禍で制限されていた活動が緩和されたことから，小学校に出向いての活動ができるようになった。 ・普通科の課題探究において，ゴミ問題や商店街の活性化，観光資源の有効活用などの地域課題解決に向けた研究が行われた。	B	・今年度も一宮公民館の協力を得て，各種研修会を実施することができた。また，例年1年生が行っていた近隣の小学校に出向いてのボランティア活動を復活させることができた。 ・来年度以降，現在行っている活動を増やすことは難しいことから，一つ一つのプログラムを充実させていくことが重要である。 ・普通科課題探究においては，地域のニーズを生徒に伝えつつ，生徒の探究意欲を刺激するような提案を考えたい。

(5) 教育体制の整備・拡充（ 総合評価：Ｂ ）

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況（課題）と改善の方向性	具体的方策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	結果分析・改善策
教務課	実践的な知識・技能の獲得をめざした授業例の実例を集め情報を発信する。	・自主研修としての授業実践の働きかけが不足していた。 【改善の方向性】 ・「探究的な授業」、「ICTを活用した授業」、「教科横断方授業」の実施の働きかけを行い、実践例として情報発信を行う。	探究を意識した授業(探究チャレンジ)やクロムブックを活用した授業(反転学習やforamによる小テスト等)の実践例を集約し情報発信を行う。	・学校全体で探究型授業の改善・工夫に取組むことができる。 評価Aの基準 ・学校評価アンケート11T11の評価指数が昨年度を上回っている。	・教務課でも探究チャレンジを実施し、また実施の案内を行った。 ・クロムブックを活用した授業モデルの情報集約を行っている。	B	①教務業務について、大きなミスなく、着実に行うことができた。 ②成績管理の日程変更により、学期末の担任業務の省労力化を進めることができた。 ③自動採点システムのオンライン返信機能と学校外ネットワークでの業務ができるようにしたことにより、採点・返却業務の省力化に寄与することもできた。 ④探究チャレンジの回数は昨年度より倍増しており、自主的な授業実践の環境整備に寄与することができた。 □	B	・オンライン返却に問題が生じたため、チェックリストを作成する。 他の業務に関してもミス未然防止のための策をさらに検討したい。また、内規の中で実情と合わない部分があるので、内規の見直し・更新もはかりたい。
事務室	総務・財務等の専門性を活かし、喫緊の課題と県教育行政の動向に対応しながら、学校を支える柱の一つとして事務室を位置づけ、学校経営目標・計画達成のためのサポートを行っていく。	〇学校徴収金については、生徒に対する還元であることをを念頭に置き、説明責任が果たせるよう有益な執行を行うとともに、適宜、執行状況の確認を行っていく。 〇教職員にとって気軽に相談できる風通しのよい事務室環境の構築と来校者や生徒に対し丁寧な対応できる体制づくりを図っていく。 〇生徒の快適な学習環境の整備を引き続き行っていく。	〇従前どおり、適宜、学校徴収金収支状況を確認することなどにより、適正な執行を行っていく。 〇教職員、生徒、外部訪問者を問わず、できること・できないことについて、明確に説明し、丁寧に対応することのできる事務室環境を目指す。 〇普通教室・特別教室を中心に生徒に不便を感じさせない学習環境づくりを行う。	〇生徒への還元と保護者が疑義を生じない執行体制を維持する。 A基準：予算の執行について、明確に回答することができる 〇事務室と教職員・生徒等の間に相互理解ができる環境が構築できる。 A基準：全職員から相談しやすい事務室と認識されるようになる。 〇各教室環境の整備か整う。 A基準：学校評価アンケートにおいて要望(施設・設備を除く)がでなくなる。	〇予算編成内容を明確にし、支出内容を従前以上に精査して、生徒の学習環境が充実したものとなるように執行している。また、毎月、各会計の出納状況を複数で確認する体制を整え適正な執行が出来ている。 〇教職員間の相互理解については、双方の意思・情報を共有することが足らなかったと感じることがあり、今後の課題である。外来、生徒等への対応については常に丁寧な対応が出来ている。 〇老朽化が著しい各教室の環境については、県に対して整備要求を続けているが、建具類や情報機器については迅速に整備を行っている。	B	〇生徒の学習環境が充実したものとなるように教室の机・椅子の更新、昇降口のシューズロッカーの更新、校内サーバーの更新やICT機器の導入を推進している。 〇今年度より、学校徴収金会計については、毎月各会計の出納状況を複数で確認する体制が整えられた。 〇教職員との業務確認、情報交換を徹底し、意思や業務情報を共有することが出来るようになってきている。外来、生徒等への対応については常に丁寧な対応が出来ている。 〇老朽化が著しい校舎の環境については、長寿命化工事の早期実施を県に求めるとともに、危険箇所や機能しない箇所ごとに県に対して整備要求を続けており、随時増額予算を確保出来ている。	B	〇校舎建物だけでなく関連設備（電気設備・給排水設備・浄化槽設備等）を含め学校全体が老朽化していることから、再三長寿命化工事の実施を求めているが、県財政の都合で実施時期が明確ではない。そのままにするのではなく、何が今必要であるか教職員間の情報を一層集約する必要を感じる。少しでも教育環境の改善が出来るよう迅速に判断し予算を確保していきたい。 〇学校徴収金については、適切な徴収額や執行内容等の管理が出来るよう各会計ごとに改善点があれば修正しながら検討していきたい。